

---

淫獄包囲網

淫獄包囲網 —調教闇サイトに狙われた  
女子大生—

久遠 真人





## 目次

- |     |            |    |
|-----|------------|----|
| 【1】 | 悪夢のはじまり    | 6  |
| 【2】 | 悪意が巢食う闇サイト | 16 |
| 【3】 | 待ち受ける卑劣な罟  | 28 |
| 【4】 | 強要される屈辱な謝罪 | 38 |
| 【5】 | 捕獲されたターゲット | 52 |
| 【6】 | 拘束椅子の美しき獲物 | 68 |
| 【7】 | 女体を狂わす魔薬   | 86 |

【8】 屈服の奴隷宣言



## 【1】悪夢のはじまり

涼やかな朝の空気の中、アラームの音が鳴り響く。

それに急かされてボクは重い瞼を擦りながら自室のベッドから這い出てきた。

誰もいないリビングを抜けて、冷蔵庫から買いだめしてある飲むゼリーを取り出す。

最近の朝食は、これで済ませていた。簡単だし、味の種類も豊富にある。新製品の南国フルーツミックスが今のお気に入り、新製品は欠かさずチェックしていた。

そうして、手速く朝食を済ませると、通学の準備を急いだ。

顔を洗い、寝癖を直して、歯を磨く。そうして、制服に着替える頃になって、ようやく頭もまわるようになってくる。

「ふあーあッ、眠いよお……やっぱり早く寝とけば良かったなあ……」

昨夜もネットワークゲームにはまり、つい夜更しをしてしまっていた。フレンドと組むチーム戦のゲームは止め時が難しいから困ってしまう。

お父さんが長期出張で家にはいないのもあって、ついつい生活がルーズになってしまっていた。

「あッ、やっぱッ、もう、こんな時間だ」

リビングの壁掛け時計を見て、慌てて仏壇の写真の中で微笑むお母さんに手を合わせる。

幼い頃に交通事故で亡くなってから、お父さんは男手ひとつでボクを育ててくれている。今は手掛けていたプロジェクトが大詰めで、工場のある地方に単身赴任中だった。

「それじゃ、行ってくるね」

玄関へと向かい、備え付けの鏡で身だしなみを整える。そうして深呼吸をすると、扉をゆっくりと開けて外に出た。

「おはよう、いつも通り時間に正確ね」

そこには眩しいばかりの笑顔でたたずむ綾乃（あやの）さんの姿があった。

隣に住む広瀬（ひろせ）さんの一人娘で、二つ違いの幼馴染み、国立大学に通う十九歳の女子大生だ。

お隣とは幼少の頃から家族ぐるみでの付き合いで、彼女の家もお父さんを病気で亡くしてからは、お互い片親でひとりっ子というのもあって、本当の家族のような親密な関係をきずいていた。

こうして、いつもの時間に当たり前のように彼女の方から朝の挨拶をかけてくれる。幼い頃から繰り返ししてきた当たり前の光景だった。

「お、おはよう」

「あれ、寝癖ついてるよ、ほら、直してあげるからジツとしてて」

「あ、ありがとう……」

彼女が近づくと、シャンプーのいい香りが鼻孔をくすぐった。体温を感じらるほどの距離にボクの鼓動は速くなっていく。

いつしか彼女を幼馴染のお姉ちゃんから一人の女性として見るようになっていた。お陰で、こうして間近で接するだけでも胸がドキドキしてしまう。

特に高校を卒業して、都心の大学に通うようになってからの彼女は、急に大人ぽくなった気がする。

お陰で、前以上に胸の高鳴りを隠すのに苦労させられていた。

(……やっぱり、綺麗だよね)

白のスカートとネイビーブルーのブラウス、それに麻のジャケットを合わせて朝日を浴びる姿は、読者モデルのように絵になる光景だった。

卒業後に伸ばし始めて背中まで伸びた少し癖のある黒髪をバレッタでまとめて、キリリとした少し太めの眉、気の強そうな切れ長の目の整った顔立ちには、いつも見惚れそうになる。

女性にしては長身で一見ほっそりと華奢な感じに見えるけど、それは女性として必要な部分以外には無駄な脂肪がほとんどついていないだけだ。

服の上からも女性らしい見事な曲線が浮き出していて、立つ姿が本当にさまになる。そんな彼女が背筋をピンと伸ばして、横で颯爽と歩いてくれる。その事実だけで、ボクは



鼻高々となってしまうのだった。

高台にあるマンションを出ると、目の前には木々が生い茂る大きな公園が広がる。それを抜ければ最寄の私鉄駅に到着する。

公園の中を歩いていると、ここが建物が密集する都心と同じ東京だと忘れそうなほど緑が多い。

元々は人気のない街だったらしいけど、緑多いベットタウンとして大々的に開発して販売する為に、山を切り崩してボくらが住むマンションを建てたらしい。

だけど、資金不足で他の建設が遅れているために、気合を入れて作られた大きな緑道公園の中にぼつん背の高いマンションが一棟だけ建つ結果となっていた。

そんな人の気配が少ない静かな公園を、当り障りのない会話をしながら彼女と歩く十分間が、ボクの幸せな日常だった。

(ただ、それが終わると通勤ラッシュという地獄が待っているんだよなあ)

駅の反対側は昔ながらの住宅地で、自宅のあるマンション方面とは違って多くの店舗が並ぶ商店街に、最近できた大型のショッピングセンターと充実しているので買い物には困らない。

ただ、都心に向かうには電車を使う必要があって、通勤通学の時間帯の利用率が非常に高

くなくなってしまふ。

高架式のホームへと向かえば、それまでの静寂が嘘のように住宅地の人たちが都心方向へ通勤しようとする列をなして待っていた。

学生やサラリーマンでこた返している光景に軽い目眩を覚えてしまうのだけど、追撃ちをかけるように新たにホームに入ってくる電車もすでに満員状態なのだった。

視界いっぱいにはギッチリと人が詰める光景には、いつもながらボクも綾乃さんも揃って嘆息してしまう。これさえなければ、住みやすい街だと人気もでると思う。

「もう少し、電車の本数が増やして、この通勤ラッシュをなんとかして欲しいよね」  
「でも、今でも朝は結構な密度だから、これ以上は難しいでしょうね」

電車の扉が開くとわずかな人が降り、その数よりもあきらかに多い人々が乗り込もうとする。  
る。

その流れに巻き込まれるようにして、ボクと綾乃さんは車内に飲み込まれていた。

「くうっ……」

無理矢理に乗り込もうとする通勤客の流れに巻き込まれて、綾乃さんとは離れ離れになってしまった。

なんとか手放さずにすんだバッグを手繰り寄せて、周囲から押されながらも彼女を探すと、どうにか人垣の隙間から綾乃さんの姿を発見することができた。

少し離れた所に立っていた彼女だけど、その表情に違和感を感じた。

(どうしたのだろうか?)

キリリとした眉をしかめて、頬はほのかに赤く染まっていた。

最初は、すし詰め状態の車内で苦しいのかと心配したけど、しきりに身体の位置をずらしたり、鞆を抱え直したりして背後を気にしているようだった。

その視線の先を追ってみると、背後に立つふたりの男たちが目に入る。

ひとりは金髪をロン毛にした細身の男で、日焼けした肌といい全身からチャラそうな雰囲気醸し出していた。

その隣にいるのは百八十センチは越える巨漢で、スキンヘッドに強面の顔と一度見たら忘れない相手だった。

異様な雰囲気ふたり組は、周囲のサラリーマンや学生から浮いた存在だった。

そんな彼らが綾乃さんの背後に密着して、ニヤニヤと下卑た笑みを浮かべているのだから嫌な予感しかしない。

(もしかして綾乃さん……痴漢にあっている!?)

立ち並ぶ通勤客のわずかな隙間から、綾乃さんの下半身を這う彼らの手が見えた。

(た、たすけなきゃ!)

乗客たちを掻き分けて近づこうと試みるけど、元々空間の余裕のない満員電車では、なか

なか前に進めない。

迷惑そうにするサラリーマンや学生に謝りながら、それでも彼女に近づこうと奮闘する。そんなボクの存在に気付いたのだろう、ロン毛の男がボクを睨みつけてきた。

「——うっ」

鋭い眼光に射抜かれて、威圧されたボクの脚は竦んでしまっていた。

相手が相当に暴力慣れしていると、ブルブルと震えだした身体が教えてくれる。

(ああ、マズい……相手にしては、マズい相手だよ)

睨まれただけで、尻込みさせられた自分が情けなくなる。

(それでも、綾乃さんを助けないと……)

心ではそう思っても、身体は動かない。勇気をふり絞って自分を鼓舞しても脚は床に貼りついたように動いてはくれなかった。

その時だ、静かだった車内に綾乃さんの怒った声が響き渡り、スキンヘッドの大男の野太い悲鳴が続いた。

「いい加減にしてくださいッ」

「あ、いででてえ!!」

ロン毛の男がボクに意識が向いているうちに、綾乃さんが動いていた。大男の手首を掴むと得意の合気道で捻りあげていた。

「いてえなあ、この阿女あ、なにしやがるッ!!」

「とぼけないで、この手で痴漢しておいて何を言っているのよ」

怒声をあげる大男にも動じず、綾乃さんは険しい表情でピシヤリと言い放つ。

その頬が心なしか紅潮しているように見えたけど、それは怒りのためだろう。

「言いがかりをつけやがってえ、こら離しやがれッ!!」

怒気を強めて大男は彼女の手を振り払おうと試みる。

だけど、一見して華奢に見える彼女から逃れることは出来ず、いいようにあしらわれてしまっていた。

綾乃さんは、大学に入るまではボクと一緒に知り合いの武道家が開く道場に通っていた。

かなり実践的な武術を教える場所で、合気道だけでなく空手や古武術など幅広く教えてくれる。師範がその筋では有名な方らしくて門下生には警察や軍の関係者も多くいた。

そんな屈強な大人たちが並ぶ場所に、袴姿の凛々しい綾乃さんの姿を見たいがために通っていたボクとは違い、真面目に鍛錬していた彼女は道場でも上位の腕前を持っていた。

門下生である大人の男性たちを相手に、流れるような動作で次々と投げ飛ばすほどの強さだけど、最近はや学業が忙しくって、道場に行く時間を取れてなかった。

当然、彼女が目当てのボクも、いろいろな理由をつけてはサボっているのだった。

(あの様子だと日々の鍛錬は、欠かしてはいなかったみたいだね……やっぱり、綾乃さんは

強くてカッコいいなあ)

見るからにガラの悪いスキンヘッドの大男が、ふたまわりも小さい美女に取り押さえられている。

その光景に圧倒されて、周囲の乗客たちは驚いた様子で、場所を開けて傍観していた。

(……あれ？ ロン毛の男がいない！？)

気がつけば大男と一緒にいたはずのロン毛の男が姿を消していた。他の乗客にまぎれこんだのか、その姿を探しても見当たらなかった。

そうしているうちに、電車は次の駅へと到着していた。

扉が開くと乗り込もうと構えていた通勤客を押し退けて、綾乃さんに手を背後に捻られた大男が追い立てられるようにして降りていく。

その後を、ボクも慌てて追ってホームに降りた。

「てめえ、覚えてやがれよお！！」

騒ぎを聞きつけて集まってきた駅員たちに囲まれて、連行される大男が凄い目で彼女を睨みながら吼える。

それを鼻であしらっていた綾乃さんは、追いついたボクが存在に気がつくくと、途端に照れたように頬を赤らめてしまう。

「……えへへっ……また、やっちゃった」  
ボクに向かってバツが悪そうにペロツ舌をだしてみせる。その姿に子供の頃の思い出が蘇る。

道場に通う前はボクの方が強くなって、なにかと後を付いてくるのは彼女の方だった。

それが彼女が合気道を習いはじめたことで自信を持つと、立場が今みたいに逆転してしまっていた。

「ふう、綾乃さんが強いのは知ってるけど……それでも心配はするんだから、気を付けて下さいね」

「だってえ……女は弱いものだと思いついて悪さをする奴らが、我慢できないんだもの」

ボクの言葉が不満だったらしく、頬を膨らませてプイツと横を向く彼女。その姿に苦笑いを浮かべてあやしてみせる。

そうして、新たにホームに滑り込んできた次の電車に二人して乗り込んでいく。

そんなボクらを物陰からジッと見つめる視線があった。途中で姿を消していたロン毛の男が物陰から見ている。

ボクらが車中へと姿を消すと、乾いた笑みを浮かべた男は、そっと人混みの中へと姿を消していった。

## 【2】悪意が巣食う闇サイト

その日から、ボクはなかなか寝つけない日々が続いた。あのロン毛の男が睨みつける鋭い眼光を忘れられないのが原因だった。

思い出すだけで胸が苦しくなかって嫌な汗が吹き出してくる。その上、夢にまで出てきてしまうから最悪だった。

これまで、こんな経験をしたこともなく、あの男がただの痴漢とも思えない。そう思うと不安は募るばかりで、暇さえあればネットで男たちの情報を漁っていた。

すると、それらしい情報が徐々に集まってきた。

「結構、有名な奴らみたいだね……」

痴漢にまつわるサイトから仕入れた情報では、都内沿線を中心に出没しては痴漢行為を撮影している人物らしく、何度もトラブルを起しているようだった。

さらに情報を集めていくと、痴漢行為だけでなく、レイプやSM調教ものの映像を闇サイトで公開しているらしい。

その映像を見たことがあるという人物のコメントでは、出演する女優は美女ばかりで、特に調教されるM女のランクは高く、本当に拐われて調教されているかのような迫真の演技で必ず抜けると太鼓判を押していた。



その内容の過激さもあってコアなファンも多いようで、闇サイトの有料会員になるのも大変らしい。

「もう、それで、その闇サイトやらにどうやってアクセスできるんだよお」

情報が嚴重にガードされているのか、それ以上のことがわからない。

そこで、悩んだ挙げ句、闇サイトに関してのコメントを残していた人物にダメ元で接触を試みることにした。

「えーと、S Mに興味があるように装ってみるか……でも、スルーされても困るし、先日の痴漢騒動を見たと言わせてみるかな」

偶然、大男の逮捕劇を見たといえれば相手してくれるかもしれない。そんな淡い期待での仕掛けだったけど功を奏したようだ。

「えッ、もう返信が来たッ!?!」

予想以上の喰い付きに驚いてしまう。個人情報を漏らさないように気を付けながらメッセーじのやり取りを繰り返していく。

相手は自尊心が高い人物らしく、こちらが闇サイトに興味があると知っているの、やらと有料会員であることを自慢してくる。

その自慢話に付き合い続けて、ようやくアクセス方法を教えてもらえた時には、早朝と呼

ぶ方が正しい時刻になっていた。

（もう、長すぎだしい、徹夜確定だよ……はあ、ここまで来たら、少しぐらいは見てみないとね）

そのサイトは、会員からの紹介がないとアクセスもできない仕掛けになっているらしく、教えてもらった複雑な手順と発行してもらえたアクセスキーを使って、ようやくサイトの入り口に到着する。

—Heaven's Door

天国への扉という名には相応しくない、禍々しい扉を模したグラフィックとともにメッセージが表示される。

—全ての女は牝である……

—どんなに清楚な女だろうが……

—どんなに高貴な女だろうが……

—裸にされ、雄に犯されれば、ただの牝であるとわかる……

—この扉をくぐりし者は、それが真実であると知るだろう……

仰々しい文面とともに扉がひらき、画面が切り替わる。

この闇サイトでは、事前の情報通りに様々な卑猥なムービーが有料で公開されているようだった。

「痴漢」「露出」「輪姦」「監禁」「調教」と、並ぶ単語にあのふたりが関わっているのなら犯罪の気配しか感じない。

—— 鉄格子の向こうで、全裸に剥かれて鎖が繋がる首輪をはめられた清楚な女性

—— 天井から吊るされた裸体を鞭で打たれて泣き叫ぶ気の強そうな女性

—— 妊婦のように腹が膨れるほど浣腸をされて、泣きながら排泄する知的そうな女性

—— 身体に鍼を通して乳首へとピアスをはめられる号泣する気高そうな女性

目を覆いたくなる刺激の強い映像がズラリと並び、そこに記載されている卑猥な内容に眩暈を覚えてしまう。

だけど、徐々に読み進めていくうちに自分の身体に戸惑いを覚えはじめていた。

(……緊張……いや、まさか……ボクは興奮してるの?)

嫌悪感とは違う感情がまじり始めていて、ハァハァと激しく息が乱れてしまう。嫌だと思っても画面を進める動きを止められず、そんな行動をしてしまう自分の状態が正確に判断できなくなっていた。

(ダメだ……もう、止めておこう……)

切り上げようとした矢先に、新作予告と銘打たれたサンプル画面に目が止まる。

いくつものシーンを切り抜いた画像が並び、最後には動画まで用意されている。そのサムネイル画像に映る女性の姿が目についたのだった。

(まさか……)

震える手で「痴漢」「女子大生」「奴隷候補」のタグが付けられた映像を選択する。すると解像度が低く抑えられた動画が再生されはじめる。

目の部分にモザイクが入ってはいったけど、その女性は確かに綾乃さんだった。ボクも居合わせた、あの痴漢の現場を映したものだとすぐにわかる。

通勤ラッシュで乗客がスシ詰め状態の中、カメラがローアングルで彼女を捉えている。

バッグを抱える綾乃さんの背後に、スキンヘッドの大男と金髪ロン毛の男が密着しているのが見えていた。

スカートの上からもわかる肉付きのよいお尻へとスキンヘッドの大男の太い指が伸びていった。

最初は、遠慮がちに触れていた芋虫のような指が徐々に遠慮がなくなっていく。大胆に両手でヒップを撫で回して、布地の上から尻肉をわし掴んでみせる。

『うんッ……』

綾乃さんがビクリッと肩を震わせた。カバンを握る指がギュッと握られるのを肩越しに眺め、大男がニタリと不気味に笑う。

荒々しくヒップを揉み始める一方で、ロン毛の男が伸ばした手が彼女の背筋に這いずり回り、首筋や耳元に熱い息を吹きかけていった。

(綾乃さん……そんな事をされていたのか……)

いつもは凛々しい彼女の眉が困惑と嫌悪でハの字にキュッと歪められて、羞恥で耳元まで真っ赤に染まっている。

乗客が密集する空間では身動するのも一苦勞で、逃げることも叶わない。

必死に耐えながら身体を揺すり、痴漢の手から逃れようと足掻いてみせる。

だが、それがかえって彼らの嗜虐心を刺激していた。乾いた笑みを浮かべ合うと、より苛烈に肉体を弄ってくるのだった。

(……あれ……なんだろう、これ……)

羞恥に耳まで赤く染めて、必死に抗う彼女の姿を見ているうちに、心の奥から湧き上がる得体のしれない感覚に戸惑いを感じていた。

激しさを増す男たちの行為に、顔をうつむかせた彼女の朱唇が、薄く開き切なそうに白い歯が覗いているのが見えた。

(もしかして……綾乃さん、触られて感じていた?)

そんな不埒な考えが脳裏を掠めた途端、ドロリとした感情が心の奥底から這い出てくる。

それは不快で吐き気がするものだった、なのに、ジーンと脳が痺れるような感覚に包まれていた。

(ああ、これはダメだ……これ以上はダメな気がする……)

理性が警告するのに身体は言うことを聞かない。動画を止めることもできず、目も逸らすことができずにいる。

激しい動悸に襲われて胸がギュッと痛いのに、画面に映る彼女の姿に目が離せないでいた。

「ああ、綾乃さん……どうして……」

ハアハアと荒い息を吐きながら見つめる画面では、男たち手がピタリと止まっていた。

這いずりまわる二十本の指から開放されて、俯いて耐えていた彼女もホッと安堵の表情が浮かぶ。だけど、それで終わりではなかった。

大男の指が再び蠢きだして、スカートトの端を掴むと、ゆっくりと巻き上げようとしてくる。

流石に、それには耐えきれずに顔を赤面させた彼女は、バツと背後に振り向いた。

『いい加減にしてくださいッ』

『あ、いでででえ!!』

真っ赤な顔をした彼女が、大男の手を掴み捻り上げる光景は、ボクも見たものだった。

いつも通りの猛々しい武道家としての綾乃さんの姿を目にしてホッとしていた。金縛りにあったボクの身体も、いつのまにか開放されていた。

(それにしても、綾乃さん……痴漢をされて、あんな表情を浮かべていたなんて……)

普段の凛々しい彼女からは想像もしていなかった姿を見てしまい、自分でも驚くほど興奮してしまっていた。

（ああ、なにを考えてるんだ、落ち着かないと……）

気を紛らすために動画に対するコメント欄に画面を移すのだけど、そこに並ぶコメントの数々に目を通して表情を強張らせてしまう。

「牝の癖に歯向かってるんじゃないやねえよ、この女、絶対に感じてただろう」

「股を濡らしてたぜ、牝の本性を暴こうぜ」

「続編を熱く希望、ぜひ調教編を！！」

「強い女をマゾ奴隷化するのは最高だな」

「穴という穴を開発して肉便器として飼おうぜ」

「マゾ地獄に堕としてやるの、今から愉しみだな」

「まずは、いつも通りに情報収集だ、女に関する情報を求む！！」

画面を埋め尽くすほどのコメントには、綾乃への悪意のある書き込みで溢れかえっていた。

（続編……調教……マゾ奴隷化……肉便器……いったい、なにを言っているんだ……）

画面をスクロールさせると情報収集の呼び掛けに応えて、すぐさま彼女の個人情報を書き込まれてあった。

そこには、名前、身長、スリーサイズ、通っている大学名、自宅の住所、電話番号までさらされていた。

その情報を元にさらに書き込みは増えて、時間の経過とともに情報の密度が増していた。彼女の学生証や大学で学ぶ普段の姿、自宅マンションなどの写真がズラリと並び、彼女が片親で母親が海外赴任中でひとり暮らしであること、交友関係は多いが現在は彼氏がいない事まで事細かに調べ尽くしてある。

まるで私立探偵でも雇ったかのような膨大な情報には、ボクだけが知っていそうな細やかなものや、逆に知らなかったものまで多岐にわたる。

それを読んでいくうちに、神聖な領域を侵されたようで苛立ちを感じてきた。

その一方で、姿が見えぬ連中による悪意が滲み出ている書き込みの数々に、寒気を覚えずにはいられなかった。

背筋をゾクゾクとさせる悪寒の中には、密かに黒い悦楽が潜んでいたのだけど、そのボクは気がつけなかった。

徹夜までして調べた闇サイト、そこでの強烈な悪意にさらされて、そのまま学校に行こうという気分にはなれなかった。

綾乃さんに休むことを伝えると、ひどく心配されてしまった。ただの寝不足だと伝えただけ



ど、大学の講義を終えたらお見舞いに来てくると言われては、素直に喜んでしまっていた。  
(いやいや、そうじゃないよ……あの闇サイトのことを伝えなきゃ……)

あの悪意に満ちたコメントの言葉を思い出して、胃がムカムカしてくる。それを心優しい彼女に見せるのは躊躇させられた。

(やっぱり、警察に相談した方がいいよね……)

一日中悩んだ結果、それが最善の手だと思えて彼女に話す決心もついた。  
気がつけば日は傾いていて、ホッと気が抜けた途端に腹の虫がグーグーっと空腹を主張する。

現金な身体に苦笑いを浮かべたボクは、ちょうど綾乃さんから講義を終えたとのメッセージを受けて、駅まで彼女を迎えに行くことにした。

「えへへッ」

駅前で合流して夕食をともにする約束を交わして上機嫌になっていた。

鼻歌交じりに歩いて公園を抜けていこうとする。中途半端な時間だからか、周囲には人の姿はなく静かだった。

木々の生い茂る遊歩道をひとり歩いていると、目の前を遮るように突然、黒い影が立ち上がった。

「よう、上機嫌だなあ、俺の事を覚えてるか？」

深々と被ったフードを取り除き、顔を露わにしたのは金髪をロン毛にした男だった。

あの鋭い眼光で再び射竦められて、おもわず身体が萎縮してしまう。逃げるチャンスの出鼻を挫かれたボクの背後には、いつの間にか大男も立っていた。

振り向いた先には、バチバチッと閃光を放つスタンガンが握られていた。それを避ける間もなく身体に押し付けられてしまう。

「——があああッ」

違法改造して出力を上げているのか、想像以上の衝撃をうけた。そのまま膝から崩れ落ちようとするのを背後から抱きしめられる。

「悪いなあ、あの女を誘き寄せせるのに、ちょっと協力してもらおうぜ」

ロン毛の男に煙草臭い息を吹きかけられて、おもわず顔を歪めてしまう。だけど電撃を受けた身体は痺れきって、まともに動けない。

「くう、離してよ……」

男の手を振り払おうとするけど、追撃ちとばかりに再びスタンガンが押し付けられて、ボクは完全に動けなくされてしまった。

（ああ、綾乃さん、ゴメンなさい……）

グツタリと身を預けるボクを見下ろして男たちが残忍な笑みを浮かべる。

（誰か……助けて……）

必死に助けを求めようとしたけど、周囲には人影もなく、絶望的な状況だった。無抵抗になった身体をふたりで抱えあげて、そのまま遊歩道脇の茂みの中へと男たちはボクを運び込んでいった。

## 【3】待ち受ける卑劣な罠

いつの間にか意識を失ってたのか気がつくくと、大型のワゴン車のシートに座らされていた。

両腕は背後で組まされて拘束具でガッチリと固定されていた。両脚も同様の揃えたところを足首と太ももにそれぞれ幅広のベルトが巻き付けられていた。

口には赤いゴムボールの口枷が噛まされているのが、窓ガラスに反射した姿で確認できた。

外は木々が生茂るところから、まだ公園の中らしい。無駄に大きい敷地は遊歩道の周辺以外は手入れが行き届いてなくて、一步外れると森の中のようなようだった。

外はすっかり日が暮れて夜になっているらしく、周囲の闇が濃く感じてしまう。

(早く逃げ出さないと……)

試しに腕を動かそうと試みるけど、ガッチリと締め上げる拘束具は緩みそうもない。

それでも、彼らの目的が綾乃さんにあるのなら諦めるわけにはいかなかった。

だけど、その試みは早々に終わりを告げた。

「おっと、そこまでしておけよ、俺は無駄な荒事はしたくないんだ」  
背後から突然クギを刺されてビクリッと肩を震わせる。

聞き覚えのない声だった。スキンヘッドの大男とも、ロン毛の男とも声が違う。低くドスの効いた声の主に覚えはなかった。

ヒンヤリとするものが頬に押し付けられて、それがナイフだとすぐに理解する。

「そうだ、大人しくしてれば、すぐに開放してやる、わかるよなあ？」

「うッ……はひ……」

「よし、いい子だ」

予想もしていなかった第三の男が出現したことに取り乱してしまう。

「綾乃ちゃんと言ったか、あの娘がもうすぐやってくる……ああ、忠告だ、指紋認証はやめておいた方がいいなあ、こうやって意識のないうちに勝手に使われちまう。お前さんからの通話かと思っただら、タコ入道のダメ声だからなあ、明るくてた女の声が、悲痛なものに変わるの面白かったぜ」

ガラスに映り込む男の姿は、趣味の悪いスーツ姿の中年親父だった。髭面でオールバックに固めた髪が印象的だが、危険な気配をまとうのは他のふたりと変わらない。いや、それ以上だった。

「そうビビるなよ、ジツとしてれば怪我をさせないし、逆に良いモノが見れるかもしれねえぜ」

冷たいナイフの腹でピタピタとボクの頬を叩きながら、ニタリと笑う。

ライオンが笑うとしたら、こんな感じだろうか、いるだけで威圧される存在感が男にはあった。

落ち着いた物腰といい、周囲を圧倒する存在感に、この男こそがロン毛の男らのボスなのだと思感する。

そんな男まで出てきたとなると、闇サイトは想像してた以上に危険なのかもしれない。

(来ちゃダメだよ、綾乃さん……)

そう強く願ったけど、祈りは届かなかった。

「広い公園の中から、奥まったこの場所を見つけ出すのは結構な時間が、かかるだろうなあ……さあって、指定した時間まで、あと一分だ、間に合うかな………おっと、ギリギリで主役のご登場だ」

男の言葉につられて窓の外を眺めてみれば、こちらに駆けて来る綾乃さんの姿が見えた。

「ちゃんと、ひとりで来たわよッ、約束通りにあの子を放して!!」

公園中を全力で探し回ってきたらしく、ワゴン車のそばに来た綾乃さんは、綺麗な白い肌で大粒の汗を浮かばせていた。

だけど、すぐ目の前にボクがいるのに、こちらには気付いていない。窓に張り付いてみせても、まるで反応がない。

「残念だな、マジックミラーになっっているんだよ。あちらからは鏡みたい映り込んで、こ

ちらの暗い車内は見えねえよ」

その言葉が事実なのだろう、手が届きそうな距離に立っていた彼女が背を向けてしまう。背後の茂みからガサガサと音をたてて、スキンヘッドの男らが姿をあらわして彼女と対峙していた。

「いたわね。素直に放さないと、どうなっても知らないわよ」

後ろ姿からでも綾乃さんが本気で怒っているのがわかる。普段は温厚な彼女だけど、幼い頃から見してきたボクは、その強さを誰よりも知っているつもりだった。

その気迫に一瞬だけ男たちも怯むけど、その背後にあるワゴン車に視線を向けて余裕を取り戻す。

人質であるボクが存在が、やはり彼らの切り札になってしまっている。

「おお、怖い怖い、へへへッ……」

「どこにいるの？」

「後ろのワゴン車の中にいるぜ、だが、素直には会わせられねえなあ、お前には用があるんだよ」

意識をワゴン車へと向けた彼女の肩を、大男の肉厚の手が掴む。

人質がいるから無抵抗だと思いい込んで油断していたみたいだ。次の瞬間には、手首を掴まれて巨体が宙を舞っていた。

そのまま雑草が生い茂る地面に背中から叩きつけられる。その間に、綾乃さんは次の行動に移っていた。

ロン毛の男が持つスタンガンは、一撃で昏倒させる威力がある。

バリバリと電撃を放ちながら突き出される攻撃を彼女はスルリとかい潜る。そのまま腕を掴んで捻り上げて、あつという間にスタンガンを取り上げてしまう。

「いででえ、クソお、離せよお」

スタンガンを持った相手でも怯む気配もない。実際に、ふたり相手でも圧倒的な力量をもって一瞬で制圧してしまっていた。

流れるような彼女の動作は舞を踊るかのようだ。その一挙手一投足に、いつもながら見惚れてしまう。

「ただ、彼女に誤算があったのはボクと同じく相手が二人組だと思い込んでしまったことだ。」

「おっと、そこまでだぜ。月並みで悪いが、こいつの顔に傷をつけたくはないだろう？」

ワゴン車のスライド扉を開け放ち、オールバックの男がボクの頬に押し付けたナイフを見せつける。

その言葉に、ふたりを相手に圧倒してみせた彼女も余裕を消した。

「三人目がいるなんて……クッ、その上、人質なんて卑怯者ね……」



「まともにやり合おうなんて考えていないんでね。さて、まずは掴んでいる腕を離してもらおうか——おっと、下手な抵抗はするなよ」

キラリと光る刃を見据えた彼女は、相手に隙がないのを確認する。暴力を身近にする者がもつ独特な雰囲気を感じ取ったのだろう。

怒りで肩を震わせていた彼女は、掴んでいた男の腕を手放すと悔しげに唇を噛んでいた。「いてて……この阿女あ、イイ気になりやがってえ」

ロン毛の男よりも先に、投げ飛ばされた大男が起き上がると、怒声をあげて彼女に迫っていた。そのままの勢いで頬に思いつきり平手打ちを喰らわせる。

巨漢からの一撃を受けて、吹き飛ばされた彼女は雑草の上に倒れこむ。

「生意気に合気道なんかしやがってッ、牝なら大人しく腰でも振って男に媚びを売ってやがれ」

投げつけられる侮蔑の言葉に、綾乃さんはキッと睨み返す。その眼光に圧倒されて大男はたじろいでしまい、それが怒りに油を注いでしまう。

再び、反対の頬に平手打ちを喰らわせるのだけど、そこに静止の声がはいった。

「その辺にしておけ、折角の美貌が台無しになっちゃ、被写体としての価値が下がっちゃまう」

低く静かだが有無を言わさぬ重みがオールバックの男の言葉にあった。

それを受けて頭に血が昇っていた大男も冷静さを取り戻したようだ。

「へへへっ、そうだなあ。今日はこの女にたっぷり詫びをいれさせる為に来たんだったな」  
下卑た笑いを浮かべながら見下ろしてくる大男に、切れた唇の血を拭いながら綾乃さんの方が激昂する。

「詫びですって！？ なぜ、被害を受けた私が詫びをいれなければならないのよッ、普通に考えても逆でしょうッ」

「ヒヒヒッ、お前の意見なんか聞いちゃいねえよお、詫びを入れるか、可愛いあの顔がナイフで切り刻まれるかの二択なんだよ、選ばせてやるから、早く決めろッ」

「そッ……そんな馬鹿な選択なんて……」

反抗の意思をまだ捨てきれない彼女に突きつけられた不条理な選択、そんなものは断固拒絶するのが当然だった。

だけど、捕らえられたボクのせいで、彼女にはそれができない。

(ボクのことはいいいから、こんな奴ら倒しちゃってよ)

口枷さえなければ、そう訴えたかった。彼女の實力なら、三人を相手にしても勝つことは可能なはずだった。

彼女の足手まといになっている事実が悔しくて、涙で視界が歪んでしまう。

(なら、いっそのこと……)

眼前にあるナイフを見つめ、密かに覚悟を決めていた。

だけど、その決意を察したのか、男がナイフを遠ざけてしまう。

「おっと、危ねえなあ、今、なにかしようとしただろう？ 覚悟を決めるのは関心するが……一足、遅かったようだな」

男の視線の先では、ガツクリと項垂れて抵抗の意思をなくした彼女がいた。

「わかったわ……詫びるわ」

硬く握られた拳を震わせて、なんとか言葉を絞り出す。

その姿に対峙する男たちは、ニンマリと笑うと彼女に顔を寄せてくる。

「ああん？ なんだってえ？ 聞こえねえなあ……おい、なんか聞こえたか」

「いや、全然聞こえねえ、おい、もつとシツカリ聞こえるように言えや！！」

「……詫びるって言ってるの！！ だからその子を放してよッ」

悔しさに美しい瞳を潤ませながら、男たちをキッと睨みつける。

「だけど、相手より優位に立ったのを自覚した彼らが、それで納得するはずもない。」

「なんだあ？ これから詫びるにしゃちゃ、なんだか偉そうだよなあ」

「まったくだ、まったく誠意ってやつを感じないぜえ」

「そうだな、言葉使いもそうだが、まず態度が気にいらねえなあ、誠意を示すんなら、まずは下着姿にでもなって土下座してもらおうか」

「——なッ、なにを馬鹿なことを……」

「ヒヒヒッ、頭のよろしい国立大学に通っているインテリ女子大生さんならわかっていると思うが……」

男たちの視線は、車の中に捕らわれているボクに向けられる。

それに応えるように羽交い締めになっているオールバックの男が、目の前でナイフをチラつかせてみせる。

月の光を浴びて、鋭利な切っ先がキラリと冷たく反射した。

彼女との距離は約十メートル、立ち塞がる悪漢ふたりを退けて、ここまで駆けつけるには流石の彼女でも遠すぎた。

それを理解した上で男は言葉を重ねていく。

「お前さんが言うこと聞くのなら、こいつはすぐに解放してやるよ。なあに、別にお前さんの命を取ろうってわけじゃない。ただ、俺たちが満足するまで、付き合ってくれるだけでいいのさ」

他の二人と違い、妙に落ち着いた大人の雰囲気のある男の言葉が、元より選択の余地がない彼女の覚悟を決めさせる。

「わ、わかり……ました」

血を滲ませた唇をひらき、恥辱に声を震わせた彼女は、そうして自らの敗北を受け入れ

た。

## 【4】強要される屈辱な謝罪

今、いる場所は昏い茂みに囲まれたちよつとした広場になっていた。

遊歩道からは随分と離れているのか、生い茂った樹木に阻まれて、外灯の光もここまでは入り込まない。

その空間の真ん中で、頭上からの月明かりを浴びて綾乃さんは立っていた。

細くしなやかな指がスカートのフックへとかけられる。だけど、その先へとはなかなか踏み出せずにいた。

それは、そうだろう。二十歳前の女性がこれから下着姿で謝罪させられようとしているのだから、躊躇するのも当然だった。

だけど不条理な要求をしてくる男たちは、気長に待つ気などなかった。

「早くしやがれッ、トロトロしてんじゃねえよお」

「なんだったら、俺たちで優しく脱がしてやろうか？」

あざけ笑う男たちを、綾乃さんはキッと睨みつける。

拳は強く握られて、恥辱に肩を震わせてしまっている。その視線がワンボックス車の中でナイフを突きつけられているボクに向けられて、険しい表情が優しくものへと変わる。

大丈夫だからと彼女の瞳が訴えていた。それで覚悟がきまったのだろう。

ゆっくりと腰の金具が外されて、スカートが地面に滑り落ちた。

日々の絶やさない鍛錬によって引き締まったウエスト、それはコルセットでも装着しているのかと疑うほど、深く絞り込まれていた。

綺麗な刺繍が施された白いショーツを隠すように身体が捻られて、キュッとつり上がった染み一つないヒップがよくみえる。

そこから伸びたスラリとした美脚が黒いニーハイソックスに包まれて爪先まで続いていた。

「よし、今度は上も脱いでもらおうか、折角なんだ正面を向けよ」

フロントのボタンがひとつ、またひとつと外されていくと、服の隙間からブラジャーの繫目と胸の谷間が垣間見えてくる。

スリりと紺色のブラウスが肩から抜かれて、ショーツとお揃いの刺繍入りの白いブラジャーが露わになる。

着痩せするのか、はちきれんばかりの盛り上がりを見せるバストは想像以上のボリュームだった。細身でありながら全身に適度に脂がのっているのがわかる。

きめ細かな素肌は月の光を反射して眩しいばかりで、下着姿になった綾乃さんを神々しく見せていて、おもわず溜め息が出るくらいなセクシーなプロポーシオンを前に、男たちの頬が緩んでいくの伝わってくる。

そんな彼女が、白い下着を恥かしそうに両手で隠して、美脚をくの字に曲げながら頬を染めていた。

道場での凛々しい袴姿のイメージが強いボクにとって、頭を殴られた以上の衝撃的な光景だった。

「うへッ、こりゃ予想以上の身体だなあ。最高の被写体だよなあ」

「へへへッ、まったくだ、しっかり撮影してくれよお」

いつの間にか用意されていたカメラを、ロン毛の男が向けていた。冷たく光るレンズが、下着姿になる綾乃さんをずっと記録していたらしい。

「いやああ、と、撮らないでッ」

少しでもカメラから逃れようと背を向けた彼女は、美しい顔を羞恥で真っ赤に染めると、その場でうづくまって身体を縮こませてしまう。

「てめえの詫びる姿を撮影しようっていうんだよ、あとで知りませんなんて言えねえようになあ」

「さあ、その場で土下座して謝ってもらおうか……そうだなあ、こんな感じに言えよ」

男たちに耳打ちされたセリフに、伏せられていた彼女の目は驚きで見開かれて、顔をさらに真っ赤にして睨みつける。

だけど、続けてなにかを耳打ちされると、ガックリと首をうな垂れて、力なく頷いてい



た。

「わ、わたし、広瀬 綾乃は……お、女の身でありながら……格闘技をつかい……おふたりに歯向かい……ました、誠に、申し訳……ありません」

屈辱に唇を震わせて、それでも必死に言葉を絞り出す。だけど、男たちはなかなか満足しようとはしなかった。

繰り返し、何度もやり直しを強要されて、彼女も泣く泣くそれに従った。

「おらあ、もっと声を大きく出だせよ、じゃねえと、何度でも頭からやり直させるぞお」

「ううッ……はい、私、広瀬 綾乃は、女の身でありながら格闘技を使い……お二人に歯向かいました、誠に……申し訳ありません」

「よーし、そのまま躊躇せずに、どんどん続けろやあ」

「その謝罪に……今夜は、おふたりに……お詫びを……させて……ください」

「ほう、どんなお詫びだあ？」

「綾乃は……電車で、お二人に触られて……実は……感じていたんです。綾乃は、男性に無理やり……さ、されたい願望がある……い、淫乱な……マゾです……ど、どうか……お好きのように……お黴りください……どうか……よろしく……おねがいます」

教え込まれた屈辱的な台詞をカメラに向かって言わされた。その唇は口惜しさに震えて、切れ長の目から溢れ出した涙が頬を伝ってしたたり落ちる。

最後に、深々と頭をさげさせられ土下座すると、ついに耐えきれずに肩を震わせて泣き出してしまった。

「へへへッ、そんなにお願いされちゃあ、しょうがねえなあ、詫びを受けてやるよ」

「合気道で男を軽々と投げ飛ばしていたインテリ女子大生が、実は無理やりされるのが好きなマゾとはねえ……人は見かけによらないものだよなあ」

「まったくだ、その言葉に偽りがないか、じっくり検分してやろうぜ」

そう言うと、大男はワゴン車から大きなバッグを運び出すと、その中身を土下座したまま肩を震わせている彼女の前に並べていく。

地面に置かれていったのは黒革製のゴツゴツとした道具だ。それを手に取ると、彼女の背後にまわって両腕を捻りあげる。

背後で揃えさせられた両手首に、素早く黒革のベルトが巻きつけられた。

「——な、なにをするのッ」

不意をつかれて、ハッと顔を上げた時には、もう両腕は縛られていた。背後で真っ直ぐに腕を伸ばしたまま解けなくされてしまった。

「なについて、自分でお願いしてたじゃねえかよ、へへへッ、マゾらしい格好にしてやるだけだよ」

大男が次に手にしたのは、大きな三角形をした黒革製の袋だ。

それを慣れた手つきで、抗う彼女の腕に被せていくと、指先から肩口までをすっぽりと黒革の袋に覆われてしまう。

備え付けの幅広のベルトをギチギチに締めつけられ手首、肘の上下とキツく拘束されるたびに、おぞましきから彼女は悲鳴をあげていた。

更に袋の縁から伸びた二本のベルトを肩から反対の脇の下に通すと、胸元を交差するベルトが締め上げられて、苦しそうに彼女が美貌を歪めた。

「こんな格好いやよおお、外してえええッ」

「うるせえなあ、ギャアギャア騒ぐな、まだこれからだろうがあ。ちったあ、黙ってろ」

グローブのような大男の手が彼女の顎をガツシリと掴むと、強引に口を開けさせる。そこに金属の筒のついた帯のようなモノを押し込んだ。

「いやああ……ぐがッ!? あがッ……おごおお……」

金属の筒が噛まされると、口元を覆う口枷から伸びたベルトが頬を締めつけ、後頭部でギュッと締め上げられてしまう。

その上、顎下や鼻の脇を通る頭頂ベルトまで締めつけるように調整されると、フェイスクリッチマスクという口枷は完全に装着されてしまった。

限界まで顎を開かされた彼女の口元は、完全に黒革で覆われてしまっていた。

口の部分には、風呂底の栓のような金属のリングが設置されて、小さな鎖で繋がったゴム

栓が押し込まれている。

本人の意志を無視された拘束姿は、彼女の人間性を否定して、ただの性処理の道具へと貶めるものだった。

「ヒヒヒッ、よく似合ってるぜ。マゾ奴隷の姿がよお」

「んんっ、んぐうっ……!」

ロン毛の男の言葉に、彼女はイヤイヤと首を左右に振るけど、その動きは随分と弱々しい。

大男は、そんな彼女に鋏の並ぶ肉厚の首輪を巻きつけると、首輪に繋がる鎖を掴み上げて強引に立たせた。

「うごおッ、……ぐッ、ぐえッ……ごほ、ごほッ」

首吊りのように引き上げられて、喉を締める首輪に激しくむせてしまう。

その隙にロン毛の男が彼女の足に、爪先立ちに等しい高さのピンヒールを備えたショートブーツを履かせていった。

「蹴られても嫌だからなあ、足にはこれも付けさせてもらうぜ」

ブーツの上から細い足首に足枷を装着すると、お互いを三十センチ程度の短い鎖で繋いでしまう。これでは蹴る事はおろか、走る事まで封じられてしまった。

「よく似合ってるぜえ、へへへッ、マゾ奴隷の完成だな」

「うぐう……ううう……」

拘束した綾乃さんを背後から大男が抱きしめてきた。前へとまわした両手で、ブラジャーに窮屈そうに収められた乳房を掴むと、その触り心地を堪能するように荒々しく揉みだした。

「おほお、大きさもあるが弾力も最高だなあ」

「う——ッ!!」

グローブのような大きな手が双乳を掴み、たわわな肉丘へと芋虫のような太い指が埋められる。

拘束されている綾乃さんは抗うこともできずに、ただ嫌悪の呻きをあげるしかない。

だけど、そうやって嫌がる姿は男たちの獣欲を刺激させるようで、大男が乳房を責めていくうちに、ロン毛の男もショートツに触れてきた。

薄い布越しに股間を弄ってくるのを彼女も必死に避けようとするけど、背後から羽交い締めされていれば、逃げることも出来ない。すぐに下半身も捉えられて責められてしまった。

二匹の淫獣に挟まれて、成すすべもなく肉体を好き勝手に責められてしまう。そんな無惨な彼女の姿に、ボクはゴクリと生唾を飲み込んでいた。

「この女、しっかり感じてやがるぜえ、へへッ、乳首も勃ってきたぞ」

「ああ、こっちも下着に染みができて、徐々に広がってきたな」

「んッ、うんんッ」

男らの責めに綾乃さんはあきらかに反応していた。心では拒もうとも、秘所を責められ続けられれば、嫌でも女の肉体は反応してしまう。

下着の上からでも的確に刺激を与えてくる男たちのテクニクに翻弄されて、徐々に白い柔肌がピンク色に上気して、うっすらと汗をかいてきた。

「感じやすい体質みたいだな……それに、あんまり経験もないようだ、こりゃ開発しがいがあるな」

「ああ、こんなエロい肉体をしてるしなあ、最高の牝奴隷にしてやれるぜえ」

彼女の身体をいじくりながら検分していた男たちは、好き勝手に言って乾いた笑みを浮かべる。

綾乃さんは、それを気にする余裕もないようで、ギュッと目を閉じて必死に耐えようとしていた。

だけど男たちの言うように、感じやすい肉体は本当らしい。

ロン毛の男が指を前後にスライドするたびに、腰が追うようにクイクイツと揺れてしまう。それが悔しくてたまらないのに、それを止めることができないでいた。

すでにショーツも染みが遠目でも認識できるほどに激しく濡れてしまっていた。

「——んんッ」

「へへへッ、そろそろ逝っちまいそうだな、腰が跳ねてるぜ」

「ほれ、クリ責めされて一度、逝っておけよ、ほら逝けッ」

ショーツの内側に男の指が侵入してくると、充血してきたクリ×リスを摘み、擦られて、ついに耐えきれずに絶頂へと追いやられてしまった。

「んッ、んぐ——ッ」

ビクン、ビクンと身体を震わせると、そのまま大男の腕の中で脱力した彼女は、フー、フーッと荒い呼吸をしていた。

「まずは一回だ、これからたっぷりと肉の快楽を覚え込ませてやるからな」

愛液で濡れる指先を見せつけながらロン毛の男はニヤリと笑う。望まぬ絶頂を向かえさせられた綾乃さんは、目尻に涙を浮かべながらもキッと睨みつけて応えた。

まだ、男たちに抗う気力が残っている彼女に、挫けかけていたボクはホッとさせられた。

「いいねえ、こうでないと屈服しがいがないからねえからなあ」

「気の強い女を調教するのは嬉しいからな、簡単に心折れてくれるなよ」

ロン毛の男に首輪の鎖をグイッと引かれて、足元が覚束ない彼女はガクッと体勢を崩しそうになる。

それでも男たちは、そのまま彼女を連れて歩きだす。

「さあ、俺たちの根城まで付き合ってもらおうぜ」

抗おうとしても不安定なピンヒールでは踏ん張ることも難しい。それに後ろ手に拘束までされているのだから、鎖に引かれるままに歩くしかない。

少しでも歩みが遅れるようなら背後から平手が振り下ろされた。

——パッシーン

暗く静まり返った木々の間に乾いた肉音が鳴り響きわたり、染み一つない綺麗な尻肉に朱色の手形が刻まれていた。

苦悶の表情を浮かべた彼女は、すぐに首輪の鎖を引かれて歩くことを強要される。

その姿は、さながら捕虜となつて連行される女戦士のようで、哀れみを感じてしまった。

「さて、お前さんの役目はここまでだな」

成すすべもなく男たちに弄ばれる綾乃さん、その姿を茫然と見ていたボクは、彼女と入れ替わるようにしてワゴン車から降ろされると、突き倒されてしまう。

当然、手足を拘束されていれば受身も取れずに、雑草が生い茂る地面の上に倒れ込んでしまった。

「約束だからなあ、ここで解放してやるよ」

ボクの拘束を、オールバックの男が少しだけ緩めていった。

その後ろでは、シートを倒して広げられた荷台に、嫌がる綾乃さんが無理やり乗せられて



いた。

「へへへッ、優しい俺らに感謝するんだなあ」

「悪いが、綾乃ちゃんの解放は、もう少し先だぜ。俺たちの根城で、これからたっぷりと詫びてもらうからなあ」

床に膝をつかせた彼女に強引にアイマスクを装着させる。

視界を奪われた彼女の身体には、次々と追加の鎖が繋がられて荷台に固定されていった。

よくみれば車内は鉄のフレームで強化されていて、床や天井に無数の取り付け金具が設置されているのが見える。

そこから張り巡らされた鎖に繋がられて、蜘蛛の巣に絡まれた獲物のように綾乃さんは身動きが取れない状態にされてしまっていた。

「そういう訳で、大事な幼馴染はしばらく借りていくからな、なあに、用が済めば帰してやるよ」

諭すように優しいげな声だが、「だがな……」と一拍おくと声音が低くドスの効いたものへと変わる。

「もしも、警察とかに話した場合は帰ってこないと思っておけよ。お互いの親が出張で不在なのも知っている、常に監視されているのを理解しておけよッ」

耳元で囁かれる脅し文句に、震え上がってしまったボクは、何度も念を押されて頷くしか

ない。

「よーし、なら聞き分けのよいヤツにはご褒美をやる。ただ帰りを待つのも不安だなあ」

暴力的な気配に圧倒されて、芝生の上で身動きが取れなくなっていたボクの眼前に、男は意味深な笑みを浮かべて懐から出した何かを置いた。

「んん——ッ」

ワゴン車の荷台に膝立ちで固定されてしまった綾乃さんが、必死に身体を揺すっていた。

助けを求めるような悲痛な呻き声をあげるものの、眼の前で後部ドアが閉じられるとそれも聞こえなくなってしまう。

ゆっくりと走り出したワゴン車は、木々の間を抜けて奥の闇へと消えていった。

その後、必死に拘束を解けた頃には、ワゴン車は影も形もなく、ただ静寂と絶望だけがボクを包んでいた。

その手に握られていたのはオールバックの男が残っていたカードだった。

それには、例の闇サイトのアドレスと特別会員用のパスワードが記載されていたのだった。



## 【5】捕獲されたターゲット

自宅に帰りついた頃には、深夜になっていた。誰もいない室内は真っ暗で、その中をフラフラと歩いて自室に向かう。

ズキズキと手首が痛んだ。拘束から抜け出すのに擦りむいた手首から血が滲み出ていた。それでも手当する気がわからない。綾乃さんを連れさらわれて無力感に苛まれていたボクは、どうするべきかわからないでいた。

相談できるお父さんも、綾乃さんのお母さんも出張で不在だから、すぐに頼ることもできない。

警察に連絡しようと何度も迷った。そのたびに、オールバックの男に釘を指されたことを思い出して指が止まってしまう。

——もしも、警察とかに話した場合は帰ってこないと思っておけよ。お互いの両親が出張で不在なのも知っているし、常に監視されてるのを理解しておけよ。お互いの両親が出張

それが現実になるのが恐ろしくって、最後の通話ボタンを押すことができないでいた。そのまま真っ暗な自室に入って、電気もつけずにベットに倒れこんでしまう。

悔しくて涙で歪んだ視界には、強く握られた拳が震えていた。

(綾乃さんが、連れ去られた……)

先ほどまでの光景がフラッシュバックとして脳裏に浮かび上がって次々と消えていった。彼女の柔らかな白い肌に次々と黒革の拘束具が纏わりつき身体を縛めていく。

それによって理知的で凛々しかった彼女が、哀れで弱々しい奴隷へと変えられていった。男たちの欲望を吐き出す対象として、このままではマゾ奴隷に変えられてしまうに違いない。

（ボクさえ捕まっていなければ、綾乃さんなら、あんな男どもになんか負けなかったはずなのに……）

悔しそうに彼らに従う彼女の表情が脳裏に浮かぶ。

ボクにとっては綾乃さんは、ずっと憧れの存在だった。勉強は常に学校ではトップだったし、その美しさはも際立っていた。

そんな彼女が、品もなくその気になれば地べたに這わす事ができたであろう男どもの言いなりにならなければならず、キリリとした顔立ちを悔しそうに歪め、羞恥で涙を流す姿を見て、激しいショックを受けていた。

——それなのに……

彼女の窮地を目にして、心臓の鼓動はどんどん激しく鐘打ち、息をするのも苦しくなっていた。

それと同時に、脊髄を突き抜けて脳を震わせるようなドス黒い悦楽を確かに感じてしまっ

ていた。

背筋をゾクゾクと震わせて、頭が霞がかかったようにポ——つとしてくる。断続的に繰り返されるフラッシュバックによって理性が麻痺してくるようだった。

(どれくらい、そうしていたのだろう……)

気がついた時には、深夜の三時をまわっていた。

一瞬、全ては夢だった——そう思いたかった。

だけど、床に転がっている拘束ベルトと口枷が視界に入り、あれが現実だったのだと訴える。

(ああ、じゃあ……やっぱり綾乃さんは……)

理性では警察に相談するべきだと理解していた。それなのに、臆病者のボクには、行動に移すだけの勇気が出せないでいた。

姿の见えない闇サイトの会員たちが、どこで目を光らせているかわからない。オールバックの男の警告を無視した場合、本当に綾乃さんに二度と会えなくなるかもしれないと思うと、身体が震えてしまう。

(だけど、ボクは期待しているのかも知れない……)

自分の知る強くて凛々しい綾乃さんなら、決して男たちに屈したりしない。そう思っていたのだ。

そうでもしないと、心の奥底で堰き止めている、何かが溢れ出そうで怖いのだった。

「……あれ？ メッセージの着信がある」

端末の表示に気がついて確認すると、綾乃さんからのメッセージを届いていた。

(……ライブ配信のお知らせ?)

慌てて確認した内容を、はじめは理解できなかった。だけど、一緒に記載されているアドレスが、あの闇サイトのものであると気がつくのと血の気が引いていく。

脳裏には闇サイトに並んでいた調教動画を浮かんでいた。

「うう……まさか……」

心臓が再び早鐘のように激しく鼓動を繰り返し始め、ダラダラと汗が吹き出てくる。

(ああ、パニックになったらダメだッ)

ボクが綾乃さんと道場に通いながらも、上達を諦めた理由がこれだった。

心が激しく動揺するとパニック状態になってしまい、物事が正しく考えられなくなってしまっ  
まう。

軽い練習などでは問題ないのだけど、極度のストレスがかかると発症しやすいらしい。

(慌てるな……まずは、呼吸を落ち着かせよう)

目を瞑り深呼吸をすることで、少しずつ動揺する心を落ち着かせようとする。それでも、今回はなかなか成功せずに、時間だけが過ぎていく。

(落ち着け……落ち着け……)

不安でいっぱいな気持ちを脇に置いて、少しづつ心を軽くするイメージを描く。

そうして、徐々に早鐘のように脈打っていた鼓動も落ち着きを取り戻していった。

「ふう……大丈夫だよ……綾乃さんなら大丈夫だ……」

祈る気持ちで閤サイトにアクセスすると、震える指でカードに記載されていた特別会員用パスワードを入力してみる。

(あッ、入れた……凄い、全ての有料コンテンツが見れるようになって……)

切り替わった画面で真っ先に目に入ったのが綾乃さんの顔写真だ。

『今回のターゲット…広瀬 綾乃』

大きく書かれた文字の下にあるのは、彼女を隠し撮りした写真だろう。

抜群のスタイルで街中を歩く颯爽とした姿、誰かに向けて少し照れた表情を浮かべる可愛い姿、袴姿で男を投げ飛ばしている凛々しい姿と、日常の彼女を撮った画像が何枚も貼り付けられていた。

そして、その後には『捕獲完了』の文字と共に、昨夜の連れ去られた下着姿で拘束された彼女の姿があった。

まるで釣り上げた大魚で記念撮影をするかのように、スキンヘッドの大男が満面の笑みで鎖を高々と持ちあげている。



それによって首輪を吊られた綾乃さんは、ロン毛の男に艶のある綺麗な長髪をわし掴みさ  
れ、顎をガツシリと掴まれて、カメラへと顔を向けさせられていた。

アイマスクと口枷で表情は隠されているけど、歪められた凛々しい眉毛が彼女の心情を全  
てを表していた。

(ああ、綾乃さん……)

狩猟した獲物のように詳細な測定値まで記載して彼女を晒してあって、サイトの人間が彼  
女を人として扱ってないのが嫌でも伝わってくる。

ターゲットNo. 069

広瀬 綾乃、19歳

国立大学法学部1年

身長 168センチ

体重 46キログラム

バスト 90センチ

ウエスト 52センチ

ヒップ 85センチ

ルックス、ボディ共に特Aの大物

(くそッ……)

女を牝として扱ひ、狩猟のターゲツトとして愉しんでいる。

そんな男たちに対し、やり場の無い激しい怒りが身体の奥より燃え上がる。握りしめられた端末がミシミシと悲鳴をあげていた。

(くう、少し落ち着け……)

目を瞑り、何度も深呼吸を繰り返して荒れくるう心を落ち着かせようと努力する。

そうして、どうにか焦る気持ち押し止めながら、画面をスクロールさせると点滅する『獲物お披露目』の文字が目に入る。

震える指で、なんとか画面を先へと進めていくのだった。

再生された映像に映ったのは、窓もない四方をコンクリートで囲まれた薄暗い部屋だった。

高い天井からは何本もの鎖が垂れ下がり、床や壁には所々に拘束用の金具が埋め込まれていて、照明を浴びて鈍い光を放っていた。

壁際には拘束用の器具や柵に並べられた用途不明な道具が並び、西洋の拷問部屋を彷彿させる異様な雰囲気醸し出している。

「おらッ、こっちに来いッ」

ライトで照らされる部屋の中央に、黒のビキニパンツ姿になったスキンヘッドの大男が登場する。

その手に握られた鎖が引かれると、ヨロヨロとふらつく足取りで拘束された綾乃さんが姿を現した。

拐われた時と同様に、黒のニーハイソックスと白の下着姿で拘束された姿だった。

足元が覚束ないのは、アイマスクで視界が塞がれているからだけど、そうでなくても両腕はアームバインダーという拘束具で自由を奪われて、履かされたブーツは高いピンヒールなので転ばない方が難しいくらいだった。

「へへへッ、移動中も逝きまくったから、じゃじゃ馬も少しは大人しくなったよなあ」

鎖を手繰り寄せられて、足枷を繋ぐ鎖が床に擦れてジャラリと大きな金属音を響かせる。

背後からまとわりついた大男によって、ブラジャーの上から荒々しく乳房を揉まれてしま  
う。

「ううう……」

口枷を噛まされた口元から嫌悪の呻きを漏らしながら、男の手から逃れようと身体を揺する。

でも、その抵抗は心なしか弱々しく感じられた。

本当に大男が言った通りに、移動中の車でも玩ばれたのだろうか。言われてみればショートの白い生地は全体が激しく濡れていて、黒い茂みが透けて見えてしまっていた。

それでもまだ、彼女からは反抗の意思が潰えていないことが救いだった。

(やっぱり、綾乃さんはこんな卑怯な連中なんかには負けないんだよ)

自分に言い聞かせるように、何度も心の中で繰り返す。

そうしている間にも、大男によって綾乃さんは拘束を変えられていた。

足枷同士を繋げる鎖が外されて、大腿になるよう脚を開かされる。それぞれの足枷が床の金具に繋がられていく。

そうして両脚が固定されると、両腕を背後で包んでいたアームバインダーから解放されて、代わりに天井から鎖で垂れ下がる枷に、両手首がはめられてしまう。

ー ジャラジャラジャラ……

ゆっくりと鎖が巻き上げられて、両腕が引き上げられていく。そのまま、どうにか爪先立ちできる高さまで吊り上げられてしまった。

ちょうど人の字になるよう拘束された彼女は、身動きのとれない状態にされて、カメラの前さらされた。

「さあて、電車での続きといこうじゃねえかよ」

舌舐めずりしたスキンヘッドの大男が背後から密着してきた。そのグローブのような厚くて大きな手が彼女のヒップを撫ではじめる。

電車の時はスカートの布越しだったけど、今度は直接の地肌だ。秘部を守るのは下着の薄い布地しかない。

光沢あるレース生地表面を男の指がなぞり、その肉の弾力を指先で確かめていく。

「うッ、うぐううッ」

「へへへッ、今度は電車の時みたいに手首を捻り上げられねえだろう？ 好き勝手に身体をいじられて悔しいよなあ、それともマゾ女なら実はこうやって触られるのを期待してたのかよ」

「んん——ッ」

拘束された彼女が反抗できないことを良いことに、電車での痴漢行為の再現とばかりに身体を弄っていく。

両手でのガシリと尻肉をわし掴みにして、荒々しく揉む一方で、その無防備な耳元に舌を這わせてみる。

パレッタを外された艶やかで長い黒髪が、嫌がる身体の動きに合わせて緩やかに舞う。そのたびに漂う香りに大男が頬を緩めていた。

ボクも嗅いだシャンプーの香りを、大男も堪能している。その事実がボクの心を不愉快に

させていた。

電車のように周囲を気にする必要もないから、大男の動きも大胆だ。

彼女の細い身体を背後から抱きしめて、パンツの膨らみをお尻の谷間に擦りつけながら、唾液を塗りつけるようにして白い柔肌を濡れ汚していった。

「むぐらッ、うッ、うう……」

「へへへッ、耳が弱いみてえだなあ、ほれ、舌を挿れたらどうよ」

熱い吐息を耳元に吹きかけながら、嫌がる彼女の耳へと長い舌先を挿れていく。

意外に繊細な舌さばきで刺激を与えていくのだけど、美女に抱きついた強面の大男が美味そうに耳をすすする姿は嫌悪の対象でしかない。

（でも、実際に耳が弱いのは本当みたいだ）

執拗な耳責めを受けてプルプルと脚が震えだした。次第に踏ん張りが効かなくなつて、そのたびに身体が沈んでは、両腕を吊るす鎖がキシキシと軋んむ音を立てていた。

「へへへッ、尻も絶品だったが、次はお胸を確かめさせてもらうぜえ、電車では触る前に邪魔されたからなあ」

普段から肌を露出させる服を好まない彼女は、着痩せして見えるように意識してたのだと思ふ。

ブラジャーにおさめられた胸の膨らみは、深い胸の谷間をつくるほどで、そのボリューム

には驚かされる。

それを背後からまわされた大男の両手がムンズと掴む。

「へへへッ、想像以上に大きいぜえ、それに弾力も申し分ねえなあ」

掴まれた乳房はグローブのように大きな掌にも納まりきらない。指を埋めてユサユサと量感たっぷり揺らせて大男を喜ばせた。

「よおし、そろそろオツパイの方も披露させてもらうぜ」

「ん——ッ！！」

逃げることもできずに、ブラジャーのカップが強引にずり下げられる。窮屈に押し込まれていた乳房が開放されて、ピンクの乳輪が露わになってしまった。

吊鐘型の綺麗な曲線を描いた双乳は、重力に負けること無く見事なラインを維持して、乳首をツンと上向かせていた。

その乳首を指で摘まれると鼻先から甘い響きを漏らしてしまう。徐々に硬さをもって、硬く尖りだす乳首が彼女の感度の良さを物語っていた。

切なそうに腰が揺れだして、それが押し付けられた男の股間を刺激して相手をますます悦ばせてしまっていた。

「おうおう、やっぱり内心では男に触られたかったんだろう、どうやらマゾで変態女っていうのは本当らしいなあ」

高々と両腕を吊られた綾乃さんに、スキンヘッドの大男が貼りついて、魅惑のボディを貪っていた。

白い柔肌を堪能するように、再び舌が這わされると、二の腕から脇の下へと舐めると、そのまま脇腹を通って太ももへと抜けていく。そうやってナメクジが這いまわったように全身に唾液の痕を残していった。

アイマスクを装着されて見えないから、普段よりも感覚が研ぎ澄まされているようだ。だから余計に舌の動きに意識が向いてしまっていた。

相手は嫌悪するべき悪漢なのに、その舌にゾクゾクと背筋が震えさせられる。それは嫌悪のためだけでなかった。

「ううッ……うふうう」

噛まされた口枷の下で呻きをあげながら、人の字に拘束された裸体が揺すられる。

だけど、激しく動きが制限されていては相手を振りほどくのは叶わない。

それでも諦めない彼女だったけど、どうしても体力にも限りはある。徐々に動きが緩慢になってきて、それがまるで腰を振って愛撫を催促しているように見えてきてしまう。

先ほどの大男による嘲りが事実でないとは知っている。それでも、今の姿を見ていると疑念が湧きそうになる。

(いやいや、綾乃さんが、そんなわけないよ)



邪な気持ちで綾乃さんを見てしまいそうで、慌てて気持ちを引き締める。

「だけど、スキンヘッドの大男による騷りまだまだ続いていた。」

「いい牝声を響かせてきたなあ、すぐに調教してやるからなあ、だが、その前に少し愉しませてもらうぜ」

ふいに大男が離れて、執拗な愛撫からも解放された。ガックリと脱力した彼女はフー、フーツと荒い息をついていた。

「だけど、アイマスクで視界を奪われている彼女は、大男が前に回り込んでいるのに気づけていない。」

足元にしゃがみこんだ大男が、画面外から差し出された電動マッサージ機を受け取るとニヤリと笑う。

「フーブブブッ

低い振動音を響かせた電動マッサージ機の先端が、濡れたショーツに押し付けられた。

「フーぶごう！？」

不意打ちの一撃だ。薄い布地越しに破れ目へと振動が送られて、先程よりも激しく身悶えさせられる。

すでに大量の愛液を吸い込んでいたショーツが、激しい振動をうけて水分を周囲に撒き散らす。

そこへ新たに溢れ出た愛液が、次々と補充されて水分が尽きる気配はなかった。

「んぐぐう——ッ」

股間の割れ目をなぞるように移動していた電マが、その矛先がクリ×リスへと向けた。

すると、強すぎる刺激を受けて、彼女の呻き声が陰しくなる。綾乃さんが出しているとは思えない、激しい呻き声に圧倒されてしまう。

その間にも、ビチャビチャと飛び散る愛液の量がみるみると増えていて、周囲を濡らしていた。

「澄ました顔して好き者みたいだなあ、ホレホレ、痴漢として駅員に突き出した男に無様に逝かせられちまいなッ」

「んんッ、んぐう——ッ」

耐えきれずにガクガクと腰が震えはじめる。それは激しい波と化して全身に伝播していった。

そうして、ひとときわ激しい呻き声をあげて、人の字に吊られた裸体が激しく海老反りになってしまった。

(……綾乃さん)

あの凛々しかった綾乃さんが、公園でのロン毛の男に続いて、今度はスキンヘッドの大男にも絶頂させられてしまった。

前以上に激しく絶頂する姿が、事実だと素直に受け入れられなくて、ただ呆然と画面を見  
てしまう。

(……あの綾乃さんでも……ああやってイカせられちゃうんだ……)

感情が追いつかないボクの前では、絶頂による硬直が切れた彼女が、ガックリと膝が崩れ  
落ちたところで映像は終了していた。

## 【6】拘束椅子の美しき獲物

どうやら先程の映像は、すでにライブ配信が終了したもののようだった。

再生が終了すると、次の映像へと自動で切り替わり、新たに再生がはじまった映像には、頑丈そうな黒い革張りの椅子の上で拘束された綾乃さんの姿が映し出されていた。

その彼女の拘束姿には、思わず息をするのも忘れてしまう。

——すでにブラジャーもニーソックスも剥ぎ取られた彼女は、残っているのは純白のショーツのみだった。細首には肉厚の首輪がはめられて、黒革の表面には鉸が並び、所々に留め金具のリングがついている。

——両腕は首の後ろで組まされていて、交互に重ねた前腕を幅広の拘束具が包んでいる。その拘束具と首輪の後ろにあるリングが連結されて、腕を上げた状態から動けないようにされていた。

——スラリと長い美脚は踵がお尻につくように折り曲げられて、足首の枷と太ももに追加された枷が連結されている。さらに太ももから脛をベルトが巻き付けられて椅子に固定されているために、M字開脚のまま開かれていた。

——腰を突き出すように椅子へ浅く座らされているので、ショーツで辛うじて隠された股間が露わになっている。愛液で濡れた薄い布地は黒い茂みがわかるほど透けてしまい、貼り

ついた秘部など肉の盛り上がりまで克明にわかってしまっていた。

——筆り取られたブラジャーの代わりには、首輪から伸びだ四本のハーネスが乳房に絡みついていた。綺麗なラインを描く美乳を根元から搾り出すように締め上げて卑猥に変形させてしまう。その頂のピンク色の乳輪と乳首は、隠すことも出来ずに外気にさらされていた。

——その窮屈な姿勢のまましばらく放置されていたらしく、彼女の柔肌にはシットリと汗の珠が浮き出ている。苦しげに呼吸するたびに下腹部が上下して、ライトに照らされた汗がキラリと光っては闇の中で裸体を輝かせていた。

——そんな彼女の顔からはアイマスクも口枷も外されていた。お陰で彼女の素顔が確認できたけど、険しい表情のまま正面に設置されたカメラのレンズを睨みつけていた。

ただ、綾乃さんに向けられたカメラは正面の一台だけでなかった。

彼女を取り囲むように何台も配置されていて、動画配信を視聴する会員は自由に視点を切り替えて愉しむことが出来るようになっていた。

その上、その会員たちが打ち込んだコメントが画面に表示されていて、その内容は綾乃さんの方でも見えるようになっていた。

先程から流れていく文面は、彼女の捕獲を祝う内容ばかりで、闇サイトに巣食う悪意を身をもって体験させられる。彼女の表情が険しいのも、それを理解したからだだった。

「……私をどうするつもり？」

毅然とした態度を取ろうと努力していた綾乃さんだけど、椅子の上でM字開脚の姿で拘束されていれば、平静でいられる訳がない。

羞恥で耳が赤くなっているのを指摘して、会員らは虚勢をはっている姿が滑稽だとするコメントが並び、彼女を嘲笑うのだった。

「まずは、闇サイトのヘブンズドアへようこそだ。簡単に説明すると、俺たちはサイトの会員たちがターゲットに選んだ女をマゾ奴隷に躰ける調教士だ。調教している様子を会員たちに、こうして配信しているってわけだ」

芝居がかった言い回しでロン毛の男が口を開けば、それにスキンヘッドの大男が下卑た笑いを浮かべて言葉を続ける。

「それで、今回のターゲットに選ばれたのが広瀬 綾乃、お前だよお。これから俺らが徹底的に調教して、拘束されただけで股を濡らすマゾ奴隷の生まれ変わらせてやる。穴という穴を犯されて悦ぶ肉便器に仕立てようってわけだあ」

愉快そうに語るロン毛の男とスキンヘッドの大男に、綾乃さんは表情をさらに険しくする。

「そんな変態になるわけないでしょうッ、馬鹿にするにも、いい加減にしてッ」

椅子に縛り付けられていても、気の強さは変わらない。だけど男らは彼女の啖呵にも動じた様子もなく、ただ薄ら笑いを浮かべるだけだった。

その理由はすぐにわかった。次々と会員たちによって書き込まれたコメントで画面が埋め尽くされたからだ。

「強気な発言キター!!!」

「今回の女も気が強そうで、愉しめそうだな」

「早く泣き悶えるのが見てみたいぜ」

「屈服はよーッ」

「ここは、いつもヤツでいこうぜ」

驚いたことに強気な態度に会員たちは狂喜していた。嗜虐欲が強い彼らからすれば気丈な獲物ほど歓迎されるようだった。

そんな彼女をいかにして貶めようかという話題でコメントは盛り上がりはじめる。

これがわかってから二人の男も黙っていたのだろう。

「こういう訳だ、ここでは強気な発言は大歓迎なのさ、いままでの女どもも気が強かったが、すぐに泣き悶えて、最後には自ら奴隷にさせてくれと泣きながら頼みこんできたぜ」

「そういうこったあ、十二人だ。俺らふたりだけでも十二人の女どもを拐って、牝奴隷に調教してるんだぜえ、警察にパくられずに、こうしてテメエを調教できるって意味……国立大に通う女子大生なら容易に理解できるよなあ」

彼らの発言にはハッさせられた。街のゴロツキが私怨で拐ったのではなく、入念に調べら

れて実行された計画的な誘拐ということだ。

オールバックの男も只者ではない気配があった、サイトの運営などを考えてもある程度の資本が投入されているとみるべきだと考えると、何らかの組織が絡んでいると見るべきかもしれない。

——常に監視されているのを覚えておけよ

あのオールバックの男が残っていた言葉がより現実味を増してゾクリとさせられる。

反射的に周囲を見渡して、窓も遮光カーテンが綴られて、誰の視線がないのを確認する。それでも、誰かの視線を感じるようで、タオルケットを頭から被って少しでも身を隠した。

「さて、お前さんをどう責めるか決まったみたいだぜ」

その言葉で画面に注意を向ければ、なにやら数値が増えていく項目があるのに気づく。

どうやら会員らが課金をすることで、彼らで調教内容を提案するのできるようだ。同意する他の会員も追加の課金を上乘せて細かいリクエストを加えることも可能らしい。

いくつか提案されたリクエストの中で、断トツの金額を叩き出しているのが『娯楽投入』だった。後押しで追加課金されるたびに強力な薬効のものにグレードアップして、最高ランクの娯楽が選択されていた。

その強力な効果を知る会員らが興奮しているのが、ボクには不安でしかなかった。すぐに画面外に消えたロン毛の男が、透明な瓶をいくつか持って戻ってきた。



「女ひとりに、自由を奪った上に、まだそんな物を使わないとダメなの？」

軽蔑しきった目で大男を睨み付ける彼女。その侮蔑の態度に大男は顔どころか頭まで真っ赤にして怒りの形相を浮かべていく。

スキンヘッドだから、血管が頭部に浮かび赤く染まっていくのがよく見える。今にも湯気でも出そうな姿はタコ坊主というのがお似合いだった。

「こんのお、阿女あああ」

「——いい加減にしろッ」

挑発にのって手を振り上げかけた大男に、ロン毛の男が苛立ちを見せる。

あの電車で睨みつけてきた鋭い眼差しを向けられて、タコ坊主の顔から血の気が引いて面白ほど真っ青に変わっていった。

「で、でもよお、この女が……」

「そんなに、気になるんなら、また口枷を噛ませればいいだろうがッ」

ピシャリと言いつつロン毛男の言葉に、渋々とだけ大男は従う。ふたりの間でも明確な力関係があるのが、これでわかった。

「おらあ、口を開けやがれ!!」

「いやあ、やめてよッ——うッぐう……うッぐう……」

激しく首を振り嫌がる彼女の髪をわしづかみ、二人がかりで彼女の口を押し開けて、再び

フェイスクラッチマスクを強引に噛ませていった。

「うろう……」

両脇から伸びるベルトを頬に喰い込ませて、頭頂と顎下のベルトと一緒に締め上げれば、口枷からは逃れられない。

噛まされた筒によって大口を開けるように固定されて、穴から突き出た舌尖から唾液が滴ってしまうのを止められない。

「へへへッ、これで小煩くにさえずれねえなあ、よく似合ってるぜえ」

「舌を突き出した姿は牝犬みてねだぜ、まあ、この後はたっぷりとアンアンと啼いてもらいな」

ロン毛の男は、口枷にゴム栓を押し込んで蓋をすると、懐からナイフを取り出した。

「——ッ!?!」

冷たいナイフの腹で彼女の頬をヒタヒタと叩いてみせる。

「さて、まずは持ち物検査といくか、動く綺麗な肌に傷がつくぜえ?」

「くう……」

冷たい刃が彼女の頬から首筋、鎖骨と這わされて、そのまま綺麗な曲線を描く美乳を駆け上っていく。彼女は身動きも出来ずにジッと耐えているのだけど肌には鳥肌をたてていた。

「きめ細かく綺麗な肌だなあ、鞭を入れて真っ赤に染めるのも愉しそうだな」

ギュッと目をつぶり顔を背けている彼女に嘔きながら、ロン毛の男はナイフの切っ先で乳首をいたぶり続ける。

「うろう……」

そのまま張りのある美乳を滑り降りたナイフは、引き締まった腹筋を通り下腹部へと移り、刃の背が下着越しに彼女の股間を上下になぞり始めた。

「ぐッ……うろうッ……」

「その恐怖に歪み、耐え忍ぶ表情……髑りがいのある、いい表情だぜ」

残忍な笑みを浮かべる男の言葉に、彼女はカチンときたようだ。

卑怯な手を使う相手に屈するのが耐えられない性分だから、氣力を振り絞ってロン毛男を睨みつけてみせる。

「そうそう、そうやって反抗的な方が盛り上がる。精々、抗ってくれよな」

ロン毛の男は笑みを深めると、ショーツのサイドを無残にも切り裂いていき、筆り取ってしまった。

「ふぐう!?　ぐうう——ッ!!」

カメラのレンズの前に秘部をさらされた彼女の悲痛の呻きが響き渡った。

腰を突き出すように椅子にM字開脚で固定された綾乃さんから、唯一、身に付けていた

ショーツまでもが剥ぎ取られてしまった。

「ふっくうう、むーう、うぐうううッ」

椅子の上で激しく身体を揺すって足掻いても、巻きついた拘束具がギチギチと音をたてて軋むだけで緩む気配もない。

手脚を拘束されている彼女には、剥き出しにされた秘部を隠す術はなかった。

「どーれ、国立大学に通う才女のオ×ンコはどうかかな？」

「へへへっ、綺麗なピンク色だなあ、まだ全然使ってねえなあ」

「カメラにはちゃんと撮れてるか？」

「お毛けの一本一本までバッチリ撮れてるぜえ」

男たちがしゃがみこみ、彼女の秘部へと視線が集まる。画面にも、その光景がクッキリと映し出されていた。

「くうう……」

羞恥心でうなじまで真っ赤に染め上げた彼女は、顔を背けギョッと目をつぶっている。

その間に、男たちの指が秘部へと伸ばされて触れてくる。

「ーふぐう!？」

綺麗に切り揃えられた柔毛の下。硬く閉ざされた秘扉が男の指で左右の押し広げられてしまう。ゆっくりとピンクに輝く粘膜を露出させていった。

「……やはり処女膜はねえなあ、情報通りだなあ」

「ちッ、そりゃ残念だが……まあ、いいか、回数も数えるほどだろうしな」

綾乃さんが無惨にも秘所を覗き込まれたこともそうだけど、処女でないのを知らされたのはショックだった。

——彼氏ができたなんて聞いてないよ……

別にボクへの報告の義務なんてないのはわかってる。気づけなかった自分も悪いと思っ  
ている。

それでも、なにか大事なモノを盗られたようで気分が悪いのはどうしようもない。

——それとも、誰かに無理やり？

グルグルと脳裏に渦巻く可能性は、アッサリと解決する。

動画を視聴していた会員のひとりがアップしたある青年の姿が目止まる。

その人物には見覚えがあった。ボクらが通っていた道場の師範代で、兄弟子にあたる人  
だった。

大学で農業に関する研究に取り組みながら、海外ボランティアにも頻繁に参加している人  
で、好青年という言葉がピッタリの人物だった。

(でも……たしか、この春に海外に行かれたはず)

大学での研究を活かしたいと、教授の後押しを受けてアフリカにある大学研究室に留学していたはずだった。

(でも、確かに彼なら……)

道場では綾乃さんより強い数少ない人物で、彼女も慕っていたのを覚えている。

コメントから察するに、どうやら旅立まえに一夜限りの逢瀬をふたりは過ごしていたようだ。

どこで仕入れてくるのか、その時のことが細々と報告されていた。

(……ということは、この連中は、痴漢騒ぎの前から、綾乃さんのことを知っていた?)

あの痴漢騒動も突発的な犯行ではなく、彼女を狙って決行されたという方が腑に落ちた。

そんな前から彼女を嗅ぎまわる人物がいて、それにボクも含めて気づけなかったことシヨックを受ける。

監視されているという言葉が現実であることに、ブルツと寒気で身体が震えてしまう。

その間にも映像は進み、男たちによる屈辱的な検査は続いていた。

「へへへッ、奥はしっかり濡れてるな」

到着まで電動マッサージ機などを使って玩ばれた成果を確認する男たち。触れられる彼女は嫌悪に眉根を寄せて、鳥肌まで立てていた。

ロン毛の男は露出させた褻を一枚一枚捲って、腔洞をさらけ出した男らは無造作に指を押し込んでいく。

「——うぐう!!」

強引に侵入してくる痛みに拘束された身体がビクビクツツと引きつる。苦悶の呻きを上げる彼女を無視して、指はズブズブと根元まで押し込まれていった。

「く〜う、キツキツでだなあ、まるで処女のようにだぜ」

「へへへっ、こっちも可愛がってやるぜえ」

大男の太い指が肉芽を皮を剥き出し、敏感な突起をコリコリと摘んでしごき始めた。

「ふぐツ、うろううツ」

荒々しい男たちの愛撫に、彼女は目を見開き、激しく首を左右に振りたくる。

特に肉芽が辛いのか涙目になって、腰が跳ねてしまっていた。

「激しく反応してくれるじゃねえか、なら、こっちはどうだよ?」

彼女の反応に先ほどとは打って変わって上機嫌になる大男は、拘束具によって無残に搾り出された乳房へと手を伸ばす。

その揉み方は荒々しく、女に快楽を与えるつもりなど微塵もない。わし掴みにした乳房を握り潰して、弾力を愉しんでいた。

「おらおら、さっきまでの威勢はどうしたんあぁ？　へへへっ、素直に許しを請うなら考えてやってもイイんだぜ？」

下卑た笑いを浮べる大男の言葉に、彼女は薄く涙を浮べた瞳を大男へと向けると、キツと睨み付けた。

「くっ、このおお」

予想外な彼女の反応に、大男は頭頂まで血管を浮き出させて、乳首とクリ×リスを捻りあげた。

「ぐふう」

苦痛で美貌を歪めつつも、それでも彼女は睨むのを止めようとはしなかった。

「はははッ、流石は綾乃ちゃんだぜ、そうじゃないとなぁ」

その光景を脇で見ていたロン毛男は、さも楽しそうに笑うと大男が食ってかかった。

「でもよお、この糞女」

「まあ、待てって、俺たちばかり楽しんでちゃ、綾乃ちゃんには悪いからなぁ。ジックリとサービスしてやろうじゃないか」

そういうとロン毛男が顎で指示をすると、大男は壁際からワゴンを押して綾乃さんの前まで移動させてきた。

「まずは綾乃ちゃんには、無様にイキまくる姿を見せてもらおうか。その為の道具はたっぷ



りと用意してあるからな」

そういうと、彼女の目を見せ付けるようにワゴンから様々な淫具を取り出しては、目の前に並べていく。

その中には、先ほど持ってきた瓶も含まれていた。

「心配しなくていいぜ、ちゃんと全部を綾乃ちゃんの身体で試してあげるよ」

気丈にも男らを睨み付ける彼女だけど、次々と置かれていく道具を前に、瞳の奥に不安の影が横切っていた。

「まずは、綾乃ちゃんが素直になれるようにしてやろうか」

勝手な事を言いながら手術用の薄いゴム手袋を装着した男らは、それぞれが手にした瓶を見せつける。

スキンヘッドの大男が手にした瓶にはドロリとした透明な粘液が入っていた。

「この性感ローションはなあ、肌に塗りつけて使うんだが、身体の感覚をすげえ敏感にしてくれるぜえ、息を吹きかけただけでゾクゾクするらしいから、どんな不感症の女でもイチコロよ」

ドロリとした粘液は、肌への浸透性も高く、感覚神経に作用するらしい。使い続けることで効果が永続するようになり、衣服での刺激でもイクようになるかと会員らのコメントにはあった。

「ううう……」

「だがなあ、コイツの方はもっと超強力だぜ？」

続いてロン毛の男が、ゴム手袋の指先ですくってみせたのは薄ピンク色した軟膏クリームだ。

サラサラとしたクリームが指の熱で溶けて液化化していくのがわかる。

「海外で高い金を出して入手してきた媚薬だが、どんな淑女だろうとコイツを粘液に塗られると淫乱な女へと狂わせちゃう。噂じゃあ、麻薬組織が女を密売人に仕立てるのにも使われるらしいな、マ×コにこの魔薬を塗られて犯された女は、その虜になるんだぜ」

「実際に俺らでお堅い女教授に試した時には、チ×ポ狂いのまま正気に戻れねえから、そのまま変態専用の奴隷娼婦として処分しちゃったぐらいだ」

「ああ、ローションとあわせて使ったら最初は全然感じない不感症だった教授様が、上も下も涎を垂らしばなしで、穴という穴を犯してくれと哀訴するようになったのは驚いたぜえ」  
会員の中にもその映像を見ていた人がいたらしく、興奮して感想を語っていた。その中には麻薬成分が多量に含まれているので常習性が強いなどの恐ろしい情報が含まれていて、不安にさせられてしまう。

そんな強力な媚薬が、これから綾乃さんに使われようとしていた。

顔を強張らせる彼女の眼前で大男が手にする瓶が傾けられる。ドロリとした粘液がゆっく

りと柔肌へと滴り落ちていった。

「ひゃ、ひゃめ……んんッ」

「ピンヤリしたかあ？　すぐに肌に浸透すればカッカして熱くなるぜえ」

ピンの中身を全て垂らし終えると、大男は手を使って粘液を広げはじめた。

先ほどまでの荒々しさとは対照的な丁寧さで、粘液を彼女の全身へと丹念に延ばして塗り込んでいった。

首の下から足の指の合間まで、身体の隅々に粘液を塗りこまれて、彼女の裸体はライトの光に照らされてヌラヌラとテカリ、妖しい雰囲気醸し出していた。

「よし、次はこっちだ」

ロン毛の男は彼女の股間の前に椅子を持ってきて座り込むと、指で掬った軟膏クリームを秘部へと塗りつけはじめる。

「——うう」

膣壁にタツプリと塗られたサラサラの軟膏クリームは、徐々に体温で溶けはじめていく。

「へへへッ、そんなに塗りつけて大丈夫なのか？」

「なあに、気も強いし大丈夫だろう。サービスするよう会員からの強い要望だしな、もう、この女は普通には戻れないだろうがな」

膣の奥まで塗り終えると、今度は髪の一枚一枚に丁寧に塗つけていった。

「へへへッ、ならよお、こっちにもサービスしてやるぜえ」

大男は追加とばかりに、軟膏クリームを手にすると彼女の乳首とクリトリスにも盛り付けて、扱くようにして塗りつけていった。

「ぐふう、くッ、ううう……うっぐッ!？」

媚葉を裸体に塗られる恥辱に、綾乃さんは目をつぶって必死に耐えていた。

そんな彼女の髪を大男はわし掴みすると、顎も掴んで固定する。

口枷のゴム栓がロン毛の男によって抜き取られると、真紅の液体が入ったりキュールの酒瓶が近づけられてくる。

「うう……ひゃにほ……」

「安心しろ、こいつはただのアルコールだよ。ちと度数が高いがなあ」

残忍な笑みを浮かべる男の様子から、それが事実なのかは怪しい。

見開いた目で近づく酒瓶を見つめて、身体を揺すって暴れ始める。

既に大男に抱え込まれるようにガツチリと固定された頭はまったく動かず、ゆっくりと口元に近づく酒瓶からは逃れることが出来なかった。

「ひゃあ、ひゃめへえッ——うぐッ、うぐぐうッ」

口枷によって閉じられない口腔へと禍々しい真っ赤な液体が彼女の喉へと流し込まれていく。

「うぐ……うぐう……ゲホッ、ゴホッ……うぐうう」

「ほれ、溢すなよ、勿体ねえなあ」

逆流して顎から滴るのも構わず、次々と注ぎ込まれる。

そうして、酒瓶が空になると素早く口にゴム栓を押し込んで吐き出せないようにしてしまった。

会員らのコメントを信じるなら、他のふたつほど危険性はないものらしい。

スパイの尋問用に使われるもので、意識を朦朧とさせて理性を麻痺させる効果があるようだった。

その効果が効きはじめてのか、理知的な瞳がトロンと蕩けて、酔ったようにフワフワした気分になっているようだ。

その彼女の様子に、男たちは顔を見合わせて乾いた笑みを浮かべると画面外にでていった。

## 【7】女体を狂わす魔薬

モニターの中で綾乃さんはM字開脚で椅子に拘束されていた。

全身に塗りこまれた粘液の媚薬によって、ライトの光を浴びてヌラヌラと濡れ光っていた。

透き通るほど白く染みひとつない美肌が、徐々に浸透する媚薬の効果によってピンク色に染まっていった。

「うう……うぐらッ……フッ、ぐッうう……」

何重にも巻きついた黒革の拘束具を解こうと必死に身体を揺する。

スピーカーからは、その彼女の荒々しい息遣い、そして口枷の下での呻きがわずかに聞こえてくる。

——ギチッ……ギチッ……ギチッ……

彼女に絡みつく黒い拘束具は、革の振れる特有の音を立てるだけで一向に緩む気配はなかった。

「ハア……ハアッ……ハアッ……」

それでも朦朧とする意識の中でも諦めずに、彼女は何度も何度も戒めを解こうと抗い続ける。

その柔肌は媚薬の効果が進み、すでに熱病に犯されたように真っ赤に染め上げられていた。

身体が揺すられるたびに浮き出た汗の珠が、火照る肌の表面を滑り落ちていった。

「あッ……ああん……はあああ……」

しばらくして苦しげにだった息遣いに、乱れが生じはじめていた。

戒めを解こうとするたびに柔肌を伝う汗の感触に、身体をギュウギュウと締めつけてくる拘束具の感触に、いつしか彼女は身悶えしていた。

身震いするほどに快感は増していて、新たな汗を垂れ流し、拘束具が音を立てて敏感になっていく身体を締め付けていく。そうして永久機関のように、彼女を身悶えさせる悪循環に陥っていた。

「ひッ……ひぐッ……くうううッ……」

口枷によって口元は黒革で覆い隠されて、俯き垂れる乱れた前髪によって彼女の表情は伺うことはできない。

だけど彼女の乳首は充血して硬く勃ち、大きく開かされたスラリとした美脚の付け根では秘肉がブツクリと充血して、口開いた秘裂の中まで曝け出していた。

その谷間からは塗られた媚薬とは異なる透明な愛液が溢れ出していて、今では椅子の座席部分をグッシヨリと濡らすほどになっている。

そんな光景を目にすれば、彼女の身体がどんな状態なのかは痛いほどわかってしまう。

「うッ……うンッ……くう……ぐうううッ！」

切なげに身悶えしていた彼女が突然、口枷によって声にならない絶叫を上げた。

拘束された不自由な裸体を激しく仰け反らせて、ピクピクと全身を震わせる。

(……まさか……今……綾乃さんは……イッ……たの?)

背を反らせたまま硬直した身体が、一拍おいて弛緩する。ガックリと首をもたげた彼女の秘部からはドロリと大量の愛液が溢れ出して、床まで濡らして水溜りを作り上げていった。

「ハア……ハア……ハア……」

口枷で口を覆われている綾乃さんは、荒々しく鼻で息をしながら、拘束具によって圧迫され搾り出された美胸を激しく上下させていた。

「あッ、あふう……あッ、あぁ……」

しばらくするとピクツと肩を震わせたかと思うと、再び切なげに身悶えする。

薬の効果は一回の絶頂で収まるどころか、益々その力を強めて、再び彼女の心身を蝕みはじめた。

スピーカーからは、その後も耐え忍ぼうとする彼女の荒い息遣いと、身悶える度に奏でられるギチツギチツという革のしなる音が絶えることが無かった。

——ゴクリッ……



茫然として画面に映る綾乃さんの姿を見つめたまま、それまで飲み込むことすら忘れていた口内の唾液に気付いて、ゴクリと大きな音を飲み込んだ。

「……………綺麗だ」

誘拐されて、衣服を剥ぎ取られて黒革の拘束具で自由を奪われた彼女は、望まぬ絶頂を迎えさせられていた。

それなのに、そんな言葉を洩らした自分自身に驚いてしまう。

強くて、凛々しくて、大人びて優しい綾乃さん。そんな彼女からは想像もできなかった姿の数々に、いつしか魅せられて、目が離せなくなってしまうていた。

だけど、それも男たちが戻ってきたことで中断されてしまう。

「イイ感じに出来上がってるみてえだな」

カメラのアングルの中に入ってきた男たちは、綾乃さんの状態で嬉々として近づいてくる。

「おお、すげえ状態だなあ」

「ヒヒヒッ、上の口も下の口も涎を垂らしっぱなしだなあ、へへへッ、水溜りができるほど気持ちいいのかよ」

男たちの言うとおりに、口枷の隙間から垂れた涎が顎を伝ってできた糸が胸元まで引いていた。

秘部の方もプックリと充血した秘唇がなんとも卑猥に見えていて、その上にある肉芽も皮が剥けて痛いほど真っ赤に充血しているのがカメラ越しでもわかった。

「どれどれ、これはどうよ」

「ひッ、くうううん」

ロン毛の男にうなじをそつと指を這わされて、綾乃さんは激しく首を仰げ反らせてガクガクと身体を震わせた。

「へへへッ、感度抜群じゃねえか」

朦朧としたまま身体を震わせて喘ぐ姿に大男は大喜びすると、彼女の秘部を指で押し広げて腔奥まで覗き込もうとする。

「うひゃあ、グチヨグチヨじゃねえか。国立大の才女もこうなったら盛りのついた牝だよなあ」

太い指が、綾乃さんの秘部を押し広げるだけで、奥からはゴプツと大量の愛液が溢れ出してくる。

その量に座席は増々濡れて、糸を引きながら床へと垂れた分が、足元の水溜りを更に大きなモノとしていった。

「へへへッ、もう垂れ流し状態だな」

「もう入れて欲しくって、しょうがない状態だな」

ロン毛の男が愉快でたまらないといった様子で、綾乃さんの耳元へと口を近づけていく。「このままでいると耐えきれずに狂っちまうぜ、素直に俺達にオネダリできたら挿れてやってもいいぜ。綾乃のマンコにぶっといち×ポを挿れてください、めちゃくちゃに犯してくださいってなあ」

だけど、下卑た笑いを浮べる男たちの思惑に反して、綾乃さんは俯いたまま激しく首を左右に振ってみせた。

「なッ、この阿女ああ」

予想外の反応に、横でニヤニヤと成り行きを見守っていた大男が激昂する。

綾乃さんの黒髪をわし掴みすると顔を引き上げる。

乱れた前髪の合間から見える綾乃さんの顔は、上気して頬を真っ赤に染めあげてはいたけど、その目にはまだ辛うじて理性の光が残されていた。

ここまで追い込まれても、氣力を振り絞り大男を睨み返すまでしてみせる。

「くそッ……こ、こ、このお……」

「ははははは、こりゃ、驚いた。この媚薬をフルセットで使って、ここまでもった女は初めてだな」

怒り心頭といった大男をよそに、ロン毛の男は心底楽しそうに大笑いを始めた。

その様子に、毒気を抜かれた大男が呆けたように相棒を見つめている。

「最高の獲物じゃねえか。なあ、お前もそう思うだろ？」

「——え？ ……お、おう」

突然笑いを止めた相棒の言葉に、戸惑いながら大男は同意する。

「そんな最高の獲物、簡単に壊しちゃもったいねえ。じっくり楽しむとしようぜ」

ロン毛の男告げられて大男も掴んでいた綾乃さんの髪を手放すと、彼女はガックリと力なく俯いた。

男たちは、並べておいた淫具を手にして、綾乃さんの前に立つ。

「さーて、始める前に……おい」

その合図に、大男が両手で綾乃さんの頭を抱えこむようにガッチリ固定した。そして無理やり顎を上げるようにすると、ロン毛男が1リットルのペットボトルを手にして近づいてきた。

「こんだけ身体の穴という穴から体液を垂れ流しているんだ、咽が乾いただろ？ 脱水症状になられても困るからな」

「へへへっ、心配せずともただの水だぜえ。まあ、ちょこっただけ気持ちよくなる薬が入ってるけどなあ」

強制的に口を開かせる開口具のリング。ポツカリと空いた口の穴へとペットボトルの口が

押し込まれた。

「ひ、ひひゃ……ひゃめへ……うぐう……がはッ、こごッ……んぐう……ごぼッ……」

コポコポッと気泡が上がり、ペットボトルの中身が凄い勢いで減っていく。

口内に次々と流れ込んでくる液体で溺れないように、彼女も必死で嚙下していった。

それでも口腔に入り込む量には追いつけずに、時折、逆流した液体が開口具とペットボトルの隙間から溢れ出して、彼女の喉を伝い流れ落ちていった。

そうして、どうにか全ての液体を飲みほしていった。

「ごぼッ、げぼッ……」

「おお、偉い偉い。さーて、一本目いつてみようか。ヒヒヒッッ」

空になったポットポットを放り捨てると、新たなペットボトルが彼女の口元に差し込まれた。

「なッ……んんーッ……んぐうッ、うぐッ、グーぐうう……がはッ」

むせる彼女に構わずに注ぎ込まれて、次のペットボトルの中身も早々と減っていった。

二本目が空になる頃には、彼女は息も絶え絶えの状態で涙目になっていた。

「おらあ、休んでいる暇なんてねえぞ！」

そんな彼女に対して、男たちは容赦なく更に二本のペットボトルを強制的に飲ませてしま

彼女が吐き出さないようにと口元の穴にはゴム製の栓がねじ込まれてしまう。そうなる  
と、咽まで込み上げてくる液体を吐かずに耐えるしかなかった。

(……でも、お陰で朦朧としてた意識も随分とシッカリしたようだ)

澄んだ瞳に理性の光が戻ってきたことは喜ばしいことだったけど、それが彼女を苦しめる  
ことにもなりかねない。

身体の内外から浸透しきった媚薬の効果を自覚させられるからだだった。

身体の内から沸き起こる激しい肉悦への渴望、秘部を蝕む激しい疼きは狂おしいほどに強  
烈だった。

しかも、時が経つほどに効果は増していくばかりで、治まる気配もない。

少しでも気を緩めれば、その渴望の波に飲み込まれてしまい、欲望のままに生きる獣にな  
りそうで恐ろしい。

それでも彼女が心を折れずにいたのは、目の前にいる悪漢たちに負けてなるものかとい  
う、女武術家としての気概だった。

「さーて、綾乃ちゃんが落ち着くまでに、集まっているライブ視聴者からの次のリクエスト  
を確認しようか、最初のリクエスト受け付けでは、媚薬の使用に人気が集まり、三種の媚薬  
セットの投入になったわけだが……」

彼女が苦しんでいる姿を背に、ロン毛の男は画面に向かって、まるでラジオのDJばりに

軽快に語ってみせ。

「さて、今のリクエスト上位は三点は、「陰毛の剃毛」「バイブ三点責め」「電マによる強制絶頂」になっているな。やはり挿入は、哀願させてこそだと、皆がわかってるみたいだな」  
男の発言に呼応するように同意のコメントが画面上に溢れかえる。

「とことんイカせて、無様な牝顔をさらさせる」

「理知的な顔が、どう歪むのか愉しみだ」

「どうせなら、潮吹き絶頂まで追い込もうぜ」

「連続絶頂を心身に覚えこませよう」

「泣いて赦しを乞うまでイカせ続けるよなあ」

「あとで、記録映像を見させて、反応をみようぜ」

コメントに併せてリクエストが上がり、脇に表示される課金額が凄く勢いで増えていく。それに対して激しい怒りを感じているのだけど、同時に奇妙な既視感をうけていた。

それが何なのか考えていて、ある状況に行き着いた。

（ああ、ここにいる会員たちは、ゲーム感覚で参加してるんだな）

周囲の熱にのぼせあがり、感情のままにコメントを残す行動には身に覚えがある。いつもプレイしているネットゲームを彷彿とさせるものがあった。

意図的にやっているのだろうけど、コマンドの選び方や細かい操作方法は、最もお気に入りになっている某会社のゲームに準じていて、細かな説明がなくても脊髄反射で対応できていた。

(……いや、まさかね……それなら、この裏技コマンドを入力したら……えッ!?)

試しにそのゲームでの裏技コマンドを打ち込んでみたところ、隠しメニューまで表示されてしまう。

(いやいや、マジですか……)

それは一般ユーは知らないコマンドで、たまたま仲良くなったフレンドがテストプレイヤーとして参加して知ったのを教えてもらったものだった。

(そう考えれば腑に落ちる部分もでてくるけど……)

会員たちが盛んに参加しているリクエスト。自分が課金したものが選ばれると闇サイト内で共通のポイントを獲得できる。獲得方法は他にもあって情報提供やオフ活動での協力などでも高いポイントを獲得できるようだった。

それらのポイントを使うことで、獲得行動が有利になったり様々な特典を獲られるようになっていく。

特にゲーマーが喜びそうなトロフィーやランキング付けまであって、参加者の射幸心を刺激する仕掛けが散りばめられていた。その造りや操作感には、やはり馴染みがあった。



(それにしても……)

裏画面では、綾乃さんが身に着けていた衣類がオークションに掛けられてもいて、なんでも金に変えてしまおうとする主催者の性格がうかがえてしまう。

それを読み解くほどに、綾乃さんを貶める元凶となる主催者やそれに便乗する会員らに、深い怒りを覚えてくる。

——綾乃さんを貶めているのは、画面に映る男たちだけでなかった……

——この闇サイトにアクセスしている人間、全てがそうなのだと、今更ながら理解した……

——まるでゲームをするかのように、参加者はゲームプレイヤーのように、綾乃さんの責めに参加して嬉しんでいる……

それを改めて認識した途端、私の胸の奥か沸々と込み上げる怒りと嫌悪感に心が焼かれてしまう。

「……ふざけてる」

怒りで震えて言葉が続かない。ただ、昏い怒りが胸のうちをジリジリと灼いていった。

そうしている間に、リクエストの受け付けが終了して、これから彼女におこなわれる行為が決まっていた。

「へへへッ、すげええ人気だなあ　今までにない参加率と課金額だけ。フルオーダーなんて初めてかもなあ」

リクエストの集計結果を見て、大男がはしゃいでいる。

それを横目にでロン毛の男が、おもむろに綾乃さんの後頭部に手を回すと、口枷を外していた。

「ぶはッ……はあ、はあ、はあ……」

「どうだあ、乾きは癒えたかあ？　媚薬がまわりきってキツイだろ？」

その問いに答える気力も残っていないのか、彼女は拘束具で締め付けられた胸元を大きく上下させながら荒い呼吸を続けていた。

無視する彼女の反応にロン毛の男は気を悪くした風もなく、M字開脚で椅子に固定された綾乃さんの正面に座り込んだ。

その眼前には、ぷっくりと充血した秘唇が口を開いていた。その隙間からとめどなく愛液を溢れ出していて、ロン毛の男は下睥た笑みを浮かべた。

「さーと、それじゃあ、よく見えるようにしないとなあ」

「——ヒッ!?　な、なにを……」

「おっ、ヒンヤリしたかあ？　だが、下手に動くと危ねえぜ」

ロン毛の男がよく泡立ったシェーピングクリームを綾乃さんの股間に塗りつけていく。

その光景を大男がニヤニヤしながらカメラを片手に覗き込んで記録していった。

——シヨリツ……シヨリツ……

冷たい光を放つ剃刀の刃が、クリームが盛られた軟肌を滑らかに滑っていく。

クリームを削がれるたびに柔毛が剃り落とされていった。

「ああ……」

刃が肌を滑る感触に、綾乃さんは身動きする事も出来ずに、ただ目をつぶって耐えている。

そうして、全てを剃り終えると蒸しタオルで綺麗にする。

「よし、ケツの方までバッチリ剃ってやったぜ」

「へへへッ、赤ん坊みたいにツルツル、クリ×リスまでクツキリ見えるなあ」

「そんな……」

男たちが言うように、陰毛は綺麗に無くなり、まりで赤児のような滑らかな肉丘が見えた。

男たちは、しきりに剃り痕に指を這わせては嘲笑をあびせると、綾乃さんは唇をグッと噛み締めたて屈辱に耐えた。

「さーて、綺麗になって見晴らしもよくなったな、次はコレをつけてやろうなあ」

取り出したのは小さなシリコン製のリングだった。

弾力性があるようで指で挟むと簡単に形が変形する。リングの内側には棘のような突起がいくつも付いているのが特徴だった。

「な、なにをを!? あッ、ひ、ひいいい」

ロン毛の指が綾乃さんの充血しきった肉芽を完全に包皮から剥きだすと、その根元にリングを括り付けてしまう。ギュッと根元を締め付けて包皮へと戻れないようされる。

外気にさらされた肉芽は、充血を増したところに、今度は大男が媚薬クリームを追加でたっぷり塗る。

自分でもろくに触られた事がないようで、リングの刺激だけでも腰が動いてしまい、悲鳴とも嗚咽とも取れない声を漏らしてしまっていた。

「ようやく、イイ声で哭いてきたな」

ヒィヒィと悶える綾乃さんが面白いのか、大男は執拗に陰核を扱って身悶えさせた。

「おいおい、その辺にしておけよ。まだまだリクエストが溜まっているんだからな」

彼女を責め続ける大男に対して、ロン毛男は苦笑いを浮かべながら、ヘラのような平べったい金具をいくつも手にする。

秘唇の中に金具をズブリと入れて膣口を広げると、後ろについたベルトで固定してしまう。

更に同じ器具をいくつも秘肉へと潜り込ませる。その度に、グジュリ、グジュリと大量の

愛液が溢れ出す卑猥な音と綾乃さんの押し殺した媚声がスピーカーから漏れ聞こえてきた。すべての器具が秘肉に掛けられると、ベルトを四方にひっぱり、ベルトの反対についているフックを利用して拘束具へと固定していった。

「うッ、くうううン」

開腹手術のように器具によってパツパツと開かれた秘唇。

四方へ押し広げられ、その内部は愛液によってヌラヌラとぬめり、ヒクヒクと蠢いている。

秘部、そしてその上で痛いぐらい真っ赤に充血した肉芽までもが、カメラの前に無残にも暴かれてしまっていた。

「おうおう、モノ欲しそうにピクピクと蠢いているぜえ」

「あああ……」

男たちに身体の内側まで凝視されて、ただでさえ怪しげな薬で狂わされてピンク色に染まっていた彼女の裸体が、羞恥心でさらに朱色に染まってしまう。

「さーて、コメントがきているぞ『頑張り屋さんの綾乃ちゃんに、ご褒美をあげてください』だってよ。優しい会員様がいて良かったな」

「まっ、でも簡単にはイカせないけどなあ、へへへッ」

ロン毛の男が新たに手にしたのは奇妙なゴム手袋だった。先程までのシンプルなものとは

違つて表面に無数のイボが生えていた。指先から手のひらにイボがギツシリと並んでいると、指を動かすだけでも奇怪な軟体動物のように見えて鳥肌がたってくる。

そのイボ手袋を装着した指が、ゆっくりと剥き出しにされた綾乃さんの秘部へと沈められていった。

「うほお、凄え喰い付きだな、ウネリながら絡みついでくる、指が痛えぐらいの締めつけだな」

「んんッ……ぬ、抜いて……あッ、ああ……嫌ッ……はあん、はああああッ」

「ほれほれ、下の口は嫌がつてねえよ」

「ああああ、いやあああッ」

スピーカーから彼女の嫌がる叫びが響いてくる。

だけど、それは最初だけだった。次第に嫌悪の響きはおさまると、熱を帯びた切なそうな媚声が変わっていった。

「んふう……あ、ああああ……やめてえ……くうううッ」

そうやって彼女の反応に変化がでくると、途中から責めに大男も加わっていた。

彼女を拘束している椅子の背後に回りこんで、伸ばした両手で彼女の乳房を揉みあげていた。

その手つきは、今までの荒々しさとは打って変わって、グローブのような肉厚なので大きな

手で乳房を優しく包みこんでマッサージするように揉みあげている。

熱い吐息を漏らしはじめた綾乃さんは、時折、硬く尖る乳首を指の間に挟まれるとキュッと眉根をよせて切なげに啼いた。

「あああ、摘まないでええ」

「遠慮するなって、もう惚けた顔をしてるぜえ、俺様に乳を揉まれて気持ちいいんだろ  
う？」

「ち、ちがうわッ……よくない……気持ちなんて、よくないわよッ」

悔しげに睨みつける彼女だけど、感じておるのは明白だった。秘裂を責めているロン毛の男も笑みを深める。

「なら、こっちも感じたりしねえよな」

慎重に蜜穴をほぐしていた男の指は二本になっていた。その挿入を深めながら、なにかを探るように真剣な表情を浮かべている。

それが彼女の快楽の源泉を探り出しているのだと、会員らのコメントで知ることができた。

「んんッ——あッ、ああんッ」

「ここだなあ」

綾乃さんが堪えきれずに反応してしまった地点を男は重点的に責めはじめた。

G スポットと呼ばれる女の急所をピンポイントで狙われてしまうと、いくら堪らえようと歯を食い縛っても、溢れ出る喘ぎを止められなくなる。

「ああ、ダメッ、そこは止めてえええ」

指が引かれるたびに、刺激を求めて腰が前に突き出てしまう。いくら理性でそれを止めようとしても、肉悦を渴望する肉体は言うことを聞きはしない。

指が前後するのに合わせて、彼女の腰がクイクイと前後に揺すられてしまう。

「あああん、悔しい……こんな……あああ、こんな奴らに……ああああッ」

二人の悪漢たちに与えられる甘美な刺激に反応するが悔しくてたまらないのだろう。

目尻に涙を浮かべて悔しがるのだけど、刺激を受けるとすぐに快樂の渦の中に身も心も溺れさせられてしまう。

すでに抗う気力も削ぎ落とされて、鼻先から媚泣きを漏らしてウツトリとしてしまうのを止められない。

「あッ、あああんッ、ああん」

無意識に振られる腰の動きが、徐々に激しくなっていた。興奮はピークに達して、激しい絶頂が間近まで迫っていたからだだった。

だけど、それが頂きへと昇りきる寸前になって、男らの手がピタリと動作を止めてしまう。



「あぁん、なんで……」

切なげに眉根を寄せた彼女は、ニヤニヤと嫌な笑みを浮かべる男たちにハッとして正気に戻された。

自らが口にした言葉に、悔しげに唇を強く噛んでいた。

だけど、男たちが再び愛撫を再開すると、すぐに淫靡な波によって彼女の理性は呑み込まれてしまう。

「あああ、ダメ、ダメなのに……あああ……」

媚薬で狂った肉体をふたりがかりで責められ続ける。それで彼女が再び絶頂に達しようとする、突き放してしまう。

絶頂をはぐらかされて焦らされる。それを続ける男たちの狙いはあきらかで、彼女の心を折りにきていた。

「おやおや、切なそうな声が出ちまってるじゃねえか？ 綾乃ちゃんよお」

「へへへッ、腰は淫らに動いて止まらねえぜ」

男たちの嘲笑を受けては、綾乃さんもハッとして自分を戒めようとする。

それでも男たちが愛撫を再開すると、身体は心を裏切って絶頂を求めてクイクイツと腰を動かしてしまう。

「ヒヒヒッ、心とは違って身体は素直になってきたみてえだなあ」

「ごまあねえなあ 所詮、お前もただの牝なんだよ」

降り注ぐ男たちの言葉を振り払うように、綾乃さんは必死に髪を打ちふるって否定しようとする。

だけど、その動きも徐々に弱まると、口から出るのは快樂に打ち震える牝の声になっていった。



## 【8】 屈服の奴隷宣言

執拗なまでの絶頂への寸止めは、一時間近くも繰り返された。

黒革の拘束具によって身体の自由を奪われて、椅子に固定されている綾乃さんの裸体は、熱病に侵さ冒されたように真っ赤に染まり、表面はまるでバケツの水を浴びたように体液とローションで濡れ光っていた。

「あああ、もう赦してええ、気が狂ってしまおうわ」

単体の使用でも強力すぎる作用のある媚薬。それをいくつも使われた綾乃さんの身体は、すでに彼女の意思では制御できなくなっていた。

身体の内外からの吸収、浸透された薬効によって感覚は鋭利に研ぎ澄まされて、そよ風にもゾクゾクと反応するほどに感度を増していた。

それでいて、外気に触れない身体の内側は、刺激を得たいと妖しく蠢き、激しい疼きによって肉悦を渴望していた。

「あああ、いいいいッ」

拘束具で絞り出された乳房を揉まれながら、イボ手袋でGスポットを重点的に責められる。

愛液で濡れる膣壁がゴム製のイボで削られるたびに、膣洞はギュウギュウと締めつけて甘

美な刺激に背筋がゾクゾクと震えてしまう。

脳が蕩けてしまいそうな悦楽に、緩んだ口端からは涎が垂れてしまっていた。

「ほれ、マゾ奴隷になるって言えよ。調教して下さいって頼んでみせろよ、じゃあねえと、何時間でも生殺しだからなッ」

「いやあああん、んッ、んうらん」

何度も絶頂を目の前で取り上げられるたびに、彼女の心はヒビ割れていくようだった。

あの綾乃さんが、光沢のある黒髪を振り乱して、凜々しかった眉をキュッと折り曲げて泣き出しそうだ。

「ほら、またマ×コが締めつけて身体が震えてきたぞ、このままイキたくはねえのかよ」

大量の愛液を掻き出しながら、無防備な陰核へともう片方の手を近づける。根元をシリコシリングで絞められて、たっぷりと媚薬クリームを塗られて真っ赤に充血した陰核は、小指の先ほどまでに肥大化していた。

それを指先で摘んで、男性のマスターベーションのように扱いてみせた。

「奴隷になると言うんだよ」

「ほおおおッ、ひやめええ、それはひやめええ」

もう内外から与えられる悦楽のうねりに、彼女も抗いきれなかった。

顎を突き上げて、下肢を淫らに激しく悶えさせると震える声で、その言葉を口にしてし

まった。

「……なります……奴隷になるからあ……お願いだから……もうイカせてえ……」

綾乃さんの口から、とうとう告げられた屈服の言葉に、男たちは嗜虐に高ぶった顔を見合わせて、ニヤリと笑みを洩らした。

「よーし、ならイカせてやるよ。これ以上、我慢すると本当に精神がイカれちゃうからなあ」

「おら、イカせてやるって言ってるだろうが、なにか言うことをあるだろうがッ」

「ああ……はい……ありがとう……ごさいます」

そこには反骨の意思はなく、与えられる絶頂を期待しているのがわかる。

ハアハアと息を乱して、期待に瞳を潤ませて見上げる姿は、まるで発情した牝犬のようだと思ってしまう。

「おいおい、それじゃ何に対しての感謝の言葉なのかわかんねえよ」

「ああん……で……では、なんて……言えば……うふうん」

「チツ、しょうがねえなあ、国立大の才女様に教えてやるぜえ」

ロン毛の男が焦らし続ける一方で、狂乱寸前の彼女の耳元にスキンヘッドの男が囁いて、セリフを吹き込んでいった。

「ああ、広瀬 綾乃は……おふたりに……絶対服従を……誓い……これから、立派な……」

マ、マゾ奴隷に……なれるよう……調教して……いただきます……ああ、この……オ、オマ  
×コもお口も……アナルも……ご主人様たちに……ザーメン処理で好き使っていたく  
で……どうか、無様に……イク姿を……ご覧ください……あぁん……だから……だから、  
もうイカせてええええッ」

正面のカメラに向かって、綾乃さんは吹き込まれた通りに屈辱的な奴隷宣言を告げた。そ  
して、最後には号泣しながら、必死にイカせてくれと訴えていた。

どうやら視聴している会員たちの同意を得てみると囁かれているようで、画面に向かって  
必死に訴え続けた。

もはや錯乱する一步手前で、麻薬患者の禁断症状みたいな様子になっていた。

実際のところ、彼女に使用された麻薬には麻薬成分が含まれているらしいので、あながち  
間違いではないのかもしれない。

——もし、それが事実なら娯楽による快楽を覚え込まされた女性は、もう彼らからは逃げ  
られない……

女性が自ら彼らを求めてしまうのだから、視えない鎖で繋がれているようなものだった。  
それなら被害にあった女性たちは、彼らを訴えようとしないうら。

改めて綾乃さんが置かれている状況を理解して、深い絶望を感じてしまった。

画面の前ではスキンヘッドの大男がパンツを脱ぎ捨てて全裸になっていた。

黒い毫毛からそそり勃つ男性性器は、会員らが剛根と呼ぶに相応しい異様な迫力があつた。

毒キノコのように傘開いた亀頭からはトロトロと先走り汁が溢れ出して、浅黒く変色した肉柱まで濡らしていた。

その剛根を見せつけられて綾乃さんは目を逸すのだけど、焦らされ続けた肉体は、熱い期待に蜜を溢れ出してしまう。

「へへへッ、コイツでトドメを刺してやるよ」

迫る大男の股間で剛根が跳ねる。一度は煮え湯を飲まされた美女が、全裸に向かれて黒草の拘束具で自由を奪われた状態で、大股を開いているのだから、大男としても興奮もひとしおなのだろう。

目をギラつかせて、ゆっくりと結合の準備に入る。

「ああ、やっぱり嫌よッ」

「もう、遅せえよお」

亀頭を薄い肉溝に押しあてられて、ズブリと侵入が果たされた。グジュリと愛液を押し出しながら挿入を深めていった。



「んッ——んうううッ」

苦悶の唸りをあげる彼女の姿が大男が悦ばせる。

絡みつく肉壺の具合がたまらねえと強面を綻ばせてインサートに取り掛かる。

「おら、おらッ、どうだあ、トドメを刺してやったぞお」

「嫌あああッ——んッ、んういやああッ」

ドストスといきなりの荒々しい挿入を受けて、綾乃さんは光沢のある黒髪を揺らして、凛々しい眉を歪める。

痴漢として突き出した男に自ら懇願して犯される。その恥辱に悶える彼女の姿に昏い悦びでゾクゾクさせられる大男は、鍛えられて肉体の甘美な肉壺の感触に酔いしれながら、勢いよく腰を打ちつけていく。

「もう、火傷しそうなぐらい蕩けてきつてギユウギユウと絡みついてきやがる。外見だけでなく中まで文句なしだぜ、これなら最高のマゾ奴隷になれるぜ」

「ううう……」

錯乱寸前まで追い込まれて奴隷宣言を言わされて、こうして犯されてしまった。彼らの言うマゾ奴隷に、彼女が着実に墮とされている事実に不安で胸が張り裂けそうだった。

唯一の救いが、それでも彼女の瞳が完全に死んでないことだろう。

「ただ媚薬で熱く狂わされた肉体は、彼女が相手を拒もうとも、与えられる刺激を悦んで受け入れてしまう。」

嫌で嫌でたまらないのに、剛根で膣壁を擦り上げられて子宮を突き上げられると、甘い牝声を上げてしまっていた。

「ああん……んんッ、あふうううッ」

「へへへッ、俺様のチ×ポが気に入ったみてえだなあ、その調子で派手にイッてみせろよ」

「ああん、嫌なのに……イキたくないのにいッ」

心身はどうに限界を迎えていた。それでも踏み止まろうとする彼女の精神力には、流石の男たちも舌を巻いたようだ。

それでも媚薬によって官能を狂わされた肉体は彼女を裏切って肉悦に浸りきっていた。

だらしなく口元から涎をたらして、子宮を突き上げられるたびに甘い声を洩らして、陥落も時間の問題に見える。

乳房をわし掴みにされて、弾力ある肉丘に指を埋めながら、大男はグイグイと膣壁をえぐりとって快楽を送り込む。

それに堪えきれずに、綾乃さんは艶ぽい喘ぎ声を響かせた。

「どうだよお、そろそろ俺様のチ×ポで無様にイケよ」

「あああ、やめてええッ、狂っちゃう」

「止めても狂って廃人だ、それならマゾ地獄で悶え狂えよ」

「あああ、ああああッ、ダメえええッ」

男の与える肉悦に肉体は完全に屈していた。あらゆる刺激を史上なものとして受け入れて、脳を焦がさんばかりの愉悦を感じさせていた。

「イクっと言えよ、それが奴隷の作法だからなあ」

「嫌あああ……ういい、うああああン」

もう彼女の気高い心をもつてしても、どうにも抗えない状況だ。

ガクッと頭を仰げ反らせて、ギチギチと拘束具をしならせながら、淫らに腰を悶えさせる。

そこへ追撃のストロークが激しく叩き込まれる。

「おら、イケよ、イクッと言っちまえよ」

グリグリと子宮を押し上げられて、為す術もなく絶頂に押し上げられた。

「ああ、もうダメええ……イ、イクッううッ」

ついに絶頂の叫びをあげさせられて、彼女は陥落させられた。

絶頂の余韻にうち震える彼女を見下ろしながら、男たちは勝利の笑みを浮かべ合っていた。

綾乃さんは椅子から下ろされると、床にひかれた黒いエアマットの上に転がされた。

首の後ろ組まされていた両腕は、改めて背後にまわされて拘束されると、組まされた腕を覆うベルトと首輪の後ろにあるリングが、鎖で繋ぎ止められた。

そうして、折り曲げたまま固定された脚で膝をつかされると、背後位の姿勢でふたたびスキンヘッドの大男に犯されていた。

パンパンと腰を尻肉に打ちつけるたびに、乾いた肉音が響き渡る。

身悶える彼女の上半身を引き起こして、背後からまわした両手で、弾む双乳を揺さぶる。

そうして、巨漢を活かしたパワフルなピストン運動を繰り返していった。

「あん、ああんツ、い、いやあッ」

ドスドスと内臓まで突き上げるような律動を受けて、綾乃さんは凜々しい美貌をさらに火照らせて、背中まである黒髪をふるいながら喘いでいた。

その官能の渦に吞まれた悩ましい姿に、会員たちと同様にボクも見惚れてしまっていた。

「随分と色気のある顔になってきたな」

「へへへッ、高潔そうな顔して、実はマゾっ気がけっこうありやがる。縛られて犯されてるのに、この乱れようは媚薬のせいだけじゃねえゼツ」

乱れた髪をわし掴みにして、ロン毛の男が彼女の顔を覗き込む。

すっかり被虐の快樂に引きづりこまれたらしく、キリリとした美貌は色気のある牝の顔に

なっていた。

切なげに眉根を寄せて濡れた瞳で見上げられると、哀愁が漂わせる姿に獣欲を昂ぶらされる。

「ああ、俺も我慢できなくなってきたな」

身につけていた衣服を脱ぎ捨てて、ロン毛の男も全裸になる。太さではやや劣るが、長さでは相棒に負けず劣らずの男根の持ち主だった。

「啞えろッ」

「い、いやよ……そんなこと……出来ないわ」

男根を眼前に突きつけられて、彼女は取り乱す。必死に顔をそむけようとするのだけど、顎を持って強引に戻されてしまう。

「すぐに複数の男を相手にすることになるんだ、どうやらフェラチオの経験はないみたいだな、なら特訓して、すぐに覚えこませてやるよ」

「ひゃ、ひゃめ……ひひゃ——うぐうう!!」

顎を掴まれて強引に口を開かされると、怒張がぶち込まれていく。

「うげえ……おごう……ごえええッ」

「歯を当てるなッ、もつと口を開くんだよ」

肉棒を押し込まれて、苦悶の表情を浮かべる。早くも目尻から涙をこぼす美女の姿に、嗜虐欲を煽られたロン毛の男は、グイグイと容赦ない腰の動きを開始する。

「もつと喉の奥まで呑み込め、舌腹を押し付けながら頬を窄める……よし、よし、大分マシになってきたな」

「んむう……うぐぐううラッ」

ロン毛の男は、あきらかにフェラチオが未経験な綾乃さんに啞えさせて、強要する口腔奉仕に酔いしれていた。

喉を突かれてえづくにも関わらず、高笑いを響かせながら激しいイラマチをおこなう。

彼女の顔を揺さぶり、ヌチャヌチャと派手な音を響かせてスロートをおこなわせていった。

苦しい綾乃さんの表情を見下ろしながら、グイグイと怒張を突き立てみせた。

「んッ、うげえええッ」

根元まで啞えさせて、喉奥をえぐりつけながらフェラチオ奉仕を心身に覚えこませていく。

その一方で、大男も呼応するように乳房を揉み上げながら、ドスドスと激しい挿入を繰り返していった。

上下の口を貫かれて串刺しにされた綾乃さんは、涙と鼻水をたれ流しながら身悶えしてい

た。

それでも媚薬で狂わされている肉体は、徐々にふたりの相手にも順応を見せはじめた。

「ううう……うふうん、うぐうううん」

「へへへッ、淫らに腰を振り出したぜえ」

「ああ、こっちもチ×ポを咥えながら陶醉した顔をしてやがる」

「なら、そろそろ一発目を出させてもらおうぜえ」

「ああ、こっちもイイだろう」

顔きあった男たちは、射精するための動きに入った。

彼女の黒髪を掴みなおして、激しく上下に揺すって怒張全体を抜かせた。

そうして白目を剥かせた彼女の頭を抱え込み、腰を震わせて射精にはいると喉奥で受け止めさせた。

「全部、喉で受け止めるッ、一滴も溢すんじゃねえぞッ」

「んんッ、んぐぐぐううッ……」

フェラチオ奉仕が初めてなら、男性の精液を口で受け止めるのも初体験だろう。

フーフーツと鼻息を荒くさせながら、ドクドクと注ぎ込まれる精液を指示された通りに受け止めようとする。

「よし、そのまま吐き出すなよ、全部飲み干すんだッ」

ゴクゴクと喉を鳴らして精飲させられると、それを見届けた大男の方も射精をはじめた。

「それッ、イクぞお、種づけしてやるから、お前もイキやがれえッ」

「ひいッ、いくうッ……あああ、イっちゃうううううッ」

拘束された裸体が限界まで仰け反り、子宮に注ぎ込まれる感触を刻み込まれながらビクンビクンとと痙攣する。

そうして拐われた綾乃さんは、男たちに犯されながら激しい絶頂を迎えてさせられた。

その後も男たちは代わる代わる綾乃さんを犯しては、愛液と精液がこびりつく男根を口で清めさせた。そのたびに犯されたことを感謝する隷属の言葉を何度もカメラに向かって言わされた。

彼らの精力の強さは飽きれるほどで、綾乃さんに休む間も与えずに何時間にもわたって犯し続けて、ついに彼女が気を失うまで淫獣たちによる宴は続けられた。





淫獄包囲網

## 淫獄包囲網 —調教闇サイトに狙われた女子大生—

久遠 真人

---

発行日 2023年2月22日  
発行者 久遠 真人  
連絡先 kudou\_kuon@yahoo.co.jp  
印刷会社名 pixivFACTORY  
使用フォント  
本文 Noto Serif CJK  
表紙 Hina Mincho  
pixiv 小説 ID 17456392



※無断転載・複製・複写・Web上への掲載は禁止です。

